

編主坊十二菴花尾

話百女下笑大



行發館學大京東

091589-000-8

特63-402

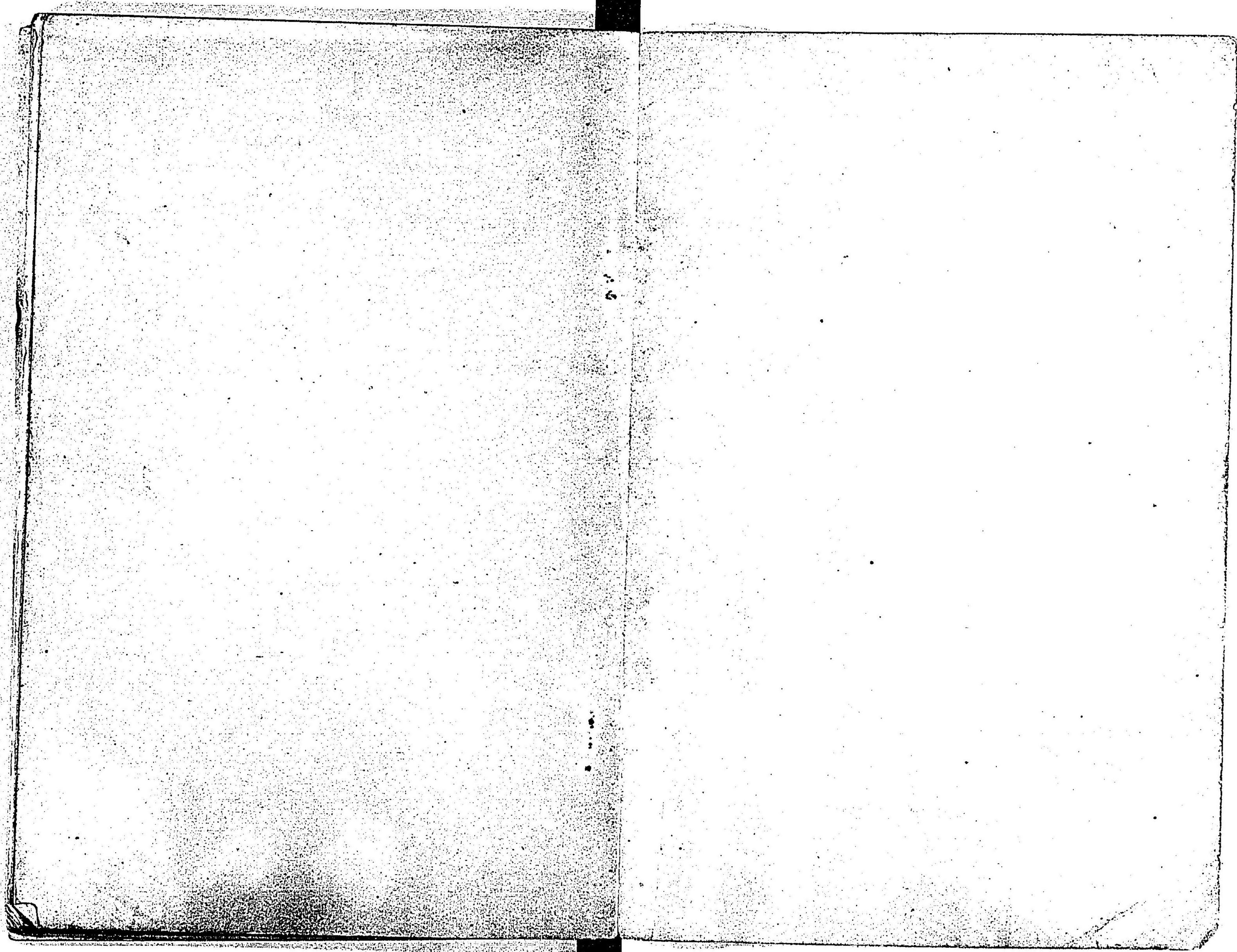
大笑下女百話

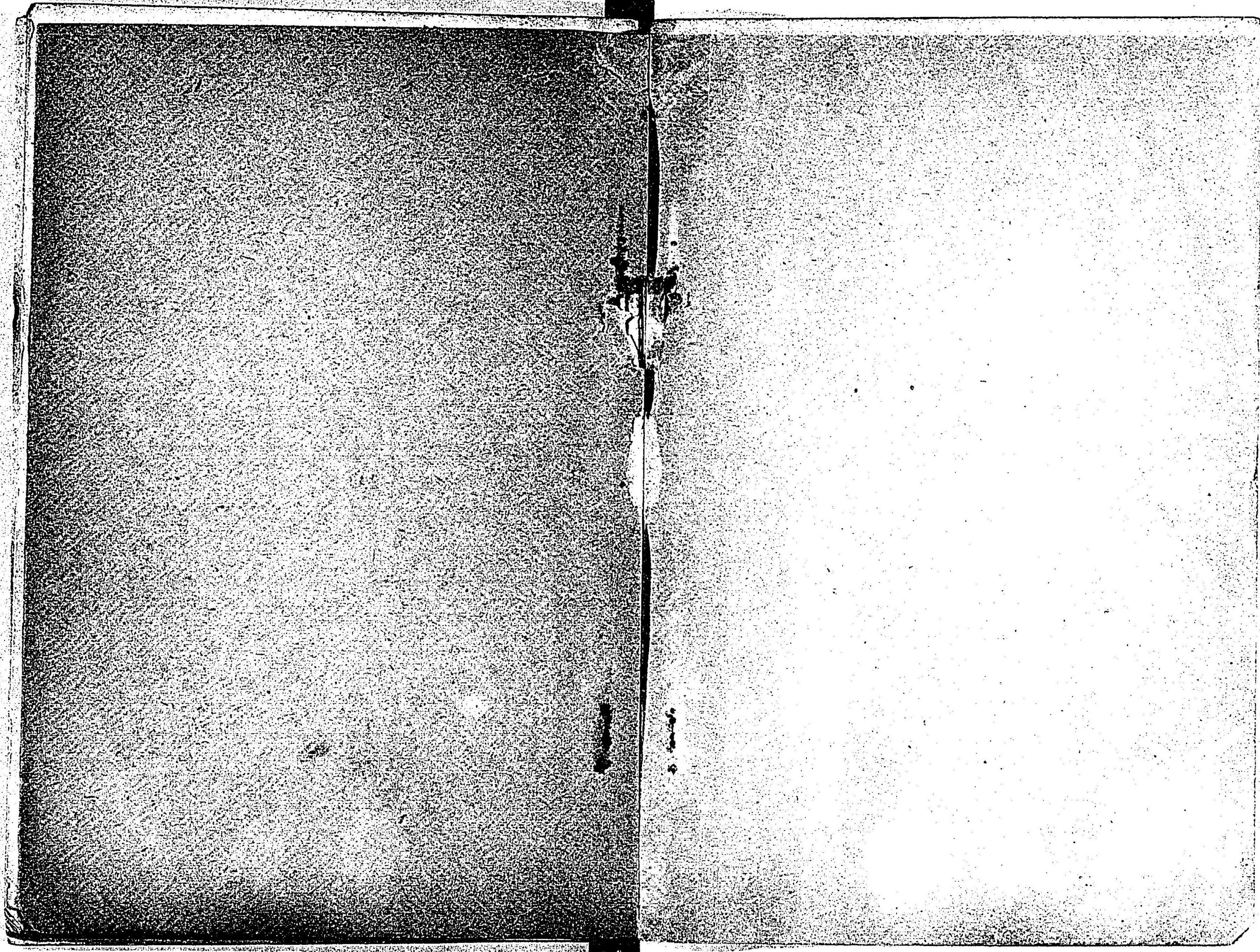
尾花庵二十坊主／編

M39

DBO-0033







はもがき

女子の天真爛漫たることを見んとおぼはば、下女の性行を研究するが捷徑じや、教育は人間の性質を變化さするに、下女には此の教育がない、習慣は吾人の性行を支配する、下女は完全なる習慣をうけ居らず、是れ下女の行爲の露骨なる所以である、無邪氣なる以所である、予は女子の眞價を知らんことを望む、故にこゝに下女の研究をはじめたのである、おかしきことも下女の露骨にある、おもしろきこと

29 11 30

(一) 次 目

○長座	一
○柱 曆	二
○中ぐらひ	二
○長ばなし	三
○咳をする	三
○飯たき男	四
○仕合せもの	五
○鳥 目	六

目 次

○はや起ら	六
○作 歌	七
○禪の川ながれ	八
○たべて見れば分る	九
○儉 約	一〇
○屁を放つた	一〇
○機 轉	一一
○巾着切り	一二
○章 魚	一二

下女の無邪氣にある、蓋し直情にしてかへりみるところなり、此の天真の爛漫たるところを露出する所以である、

明治三十九年十一月上院

二十坊主

大 笑 下 女 目 録 (二)

- 機轉者 一七
- 豆腐 一九
- 茶かゆ 一九
- ね年玉 二〇
- 炙 二二
- 近縣旅行 二二
- 麥飯 二三
- 胡椒 二三
- 奥様 二四
- 奥の院 二五

- 晝飯 二六
- 夢見 二六
- 又格別 二九
- 述懐 二九
- 内のお松どんばかりは 三〇
- 臂鐵砲 三二
- 災難 三三
- 又 三五
- 妙計 三六
- ちんび 三九

目 次 (三)

- 杏仁 四〇
- 小説家の下女 四〇
- 柔術家の下女 四三
- 感ちがひ 四四
- 茶碗で三杯 四六
- やぶにらみ 四七
- どれにしようか 五〇
- 我慢 五一
- さきでも言つてる 五二
- 南部種 五二

- 嗅い鼻血 五三
- めらしこ 五四
- 豆腐一丁 五八
- 無脈 五九
- 青物 六〇
- まるで生む 六〇
- 鼻をそぐ 六一
- 團子 六五
- 里がへり 六七
- 三品 六九

○洗 湯……………七〇

○茶 道……………七一

○長 刀……………七二

○鳶と鳥……………七三

○うじ三里……………七四

○這出の下女……………七五

○又……………七六

○又……………七七

○月 經……………七八

○注進ふかき下女……………八三

○し 白……………八五

○煙 草……………八六

○あたゝかじや……………八七

○慈 姑……………八八

○畫 解……………八九

○わるい病……………九三

○おさつ……………九五

○兵士の人形……………九六

○手がながい……………九七

○素 顔……………九九

○わる智慧の下女……………九八

○癪……………一〇〇

○同……………一〇一

○意中の人……………一〇二

○鏡 代……………一〇五

○お茶の給仕……………一〇九

○美人の相場……………一一〇

○多 言……………一一〇

○香の物……………一一二

○砂 糖……………一一三

○めまらぬ……………一二四

○針 醫……………一二四

○下女の策略……………一二五

○居 候……………一二七

○箆筒の鑲……………一二八

○うつけた下女……………一二九

○あもりの黒焼……………一二九

○合當盤……………一三二

○雷……………一三三

○氣のさくたる下女……………一三四

○地 震……………二五

○人が違ふ……………二六

○質屋の番頭……………二六

○焚きつける……………二七

○金になる……………二七

○中間兒……………二八

○闇夜の鐵砲……………二八

○莢豌豆……………二九

○流れてしまつた……………二九

○二階から飛ぶ……………三〇

○流 行……………三四

○金でひかる……………三四

○小供は正直……………三四

○夢でよかつた……………三四

○寫 眞……………三四

○善はいそげ……………三四

○喜物にあらず……………三四

○光陰は矢の如し……………三四

○瘋癲病院……………三四

○臺月口……………三四

○貸して下さる……………二五

○心にかける……………二六

○下女の情夫……………二六

○中風の藥……………二七

○惡 戯……………二七

○豆泥棒……………二七

○賭……………二七

○鼻の功名……………二七

○壁に耳あり……………二七

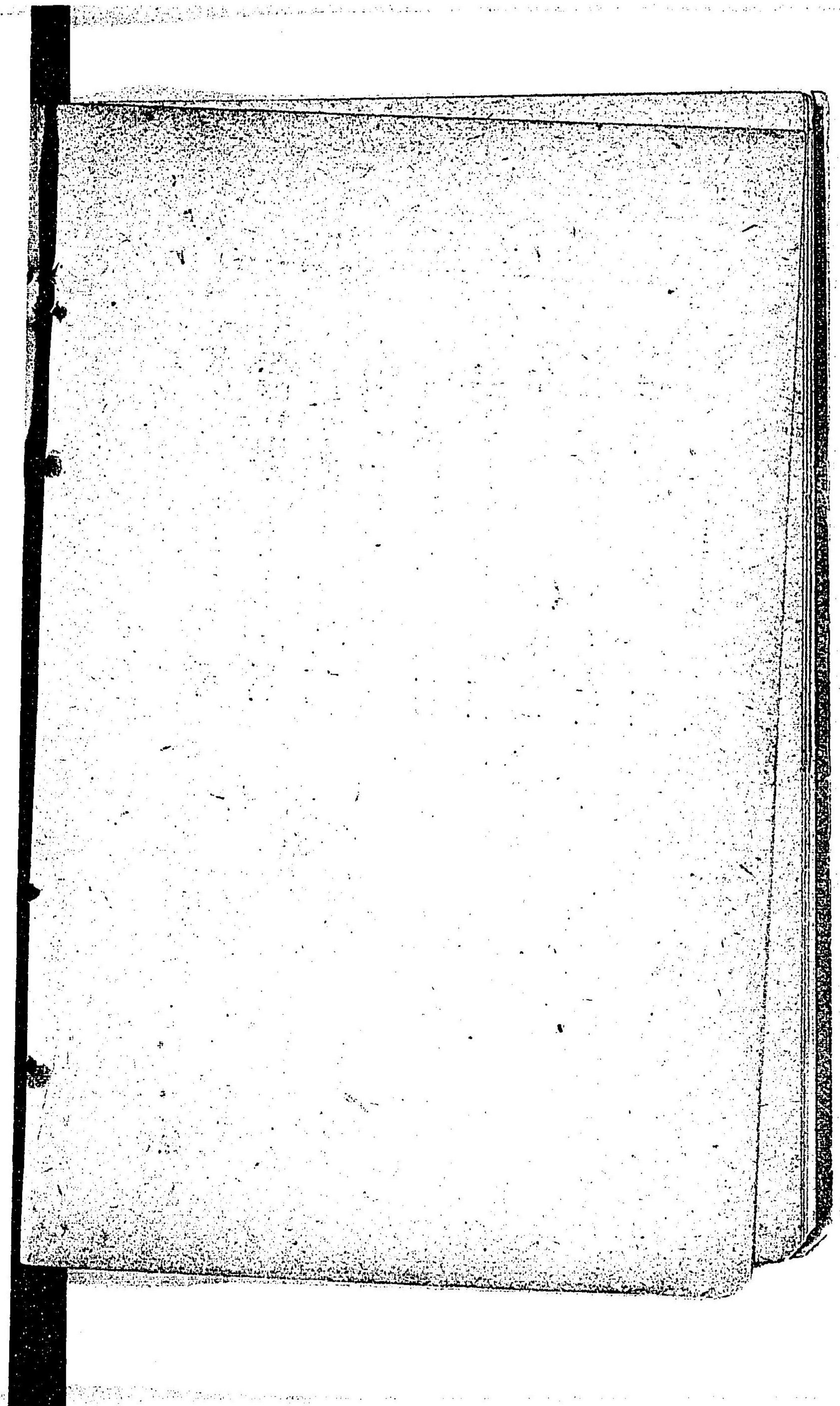
あつとせら……………二七

○下女の迷惑……………二九

○下女の奇言……………二九

○齒科醫……………二九

○平 林……………二九





若旦那

コレハ可愛想ニ

ハハハハア

誰レカ取ツテ

アレヨ

小僧

ワハハハ

サマア見ロ

イ、キミタ

面白イナア

エヘ...

番頭

ア、サ、大變

物、アイタ

物、アイタ

坊頭

ス、イ、ツ、キ、具、合

余、程、イ、ウ、イ

下女

オホ...

ア、タン、ア、シ、マ、リ

廣、張、ル、カ、ラ

ア、バ、チ、ガ、当、ツ、タ、ノ、ヨ

大笑下女百話

尾花庵二十坊主選

○長座

いつも来るぞ、長居する客が、かへりしめとにて、主人下女にむかひ、
 主今度めの人^{まご}が来たら、^{まご}箒^{ほうり}の頬^ほかむりさせて、あの人の見ぬどころ
 へ立^たて、おけよと云ひつけると、つぎの日もまたきたりしかば、下
 女はこゝろおもしろひ、早速言ひつけられし通りこしらへしが、もし
 や又ちがつて居まいかと、客とはなしをして居る主人の前へ、かの
 箒^{ほうり}をぬつとさし出し、下女『これでよろしふぞござりますか』ときいた、

○柱曆はしらごよみ

はしらごよみを買ひとりのへ、下女に言ひつけてはうせければ、下女「モシ、旦那さまこれをはりつけておきますれば、何のお役に立ちますか、旦那それか、それはナ、今年のことからは、何んでも知れるからじや、下女「へエ、うれでは羽左衛門は、どの座へ出るでございませうとさいた、

○中ぐらゐ

ある男まへのよい男が、うれしがらせを下女に云ふとて、男「おめへは、どうもかめいくてならぬといへば、下女「ナニ、嘘ばかり、おまへのやうあよい男が、どうしてわたしのやうな中ぐらゐなものに

と、顔をあかくして云ふた、

○長ばなし

下女「御新造さん、あのお客さまにもこまりますネー、いつも長ばなしばかりなすつて、モウい、加減におかへりになればよいにと云へは、御新造さんは目に角たて、新「竹やおまへそんなことを言つてはなりませんよ、あの方は私の大事な伯父さまですと言はれ、下女も面目玉をふみつぶしぬからぬ顔をして、下女「へエー、道理で御容体のいい方とおもいました、

○咳をする

主人「これく、お梅や、おまへはよく咳をするネ、梅「へイ、わたく

しは咳持で、とてへ御奉公いたしまして、いつも此れでござります。旦那さまもよく咳をなされますネ主人、それサ、それだからおまへが側へくると、こちは大變こまるよ、下女梅「何故でござります、主人」なせつて、おまへが始終咳をするからよ、おまへの咳をするあいだは、こちらでしたくても、されんからこまるのじや、下女「どうして又わたしと」所に、咳とされるのがわるふとさいます、何も咳をどなじにしたつて、かまはないではありませんかと、少しムツトする、主人「どうもそれは一所にされぬのじや、下女」それやまたナゼです、主人「男女はせきを同じうせずと云ふからよと云ふた、

○飯たき男

飯たき男「お竹さん、どうから云はふと思ふて居ても、どうも人にはせかれてはなすことは出来なんだ、寝てもさめても此方さんの姿が目さきにちらつきて、どうもしやうがなくなつたが、一体こなさんはどうしてくれる氣だぞ、正血から挑みかけられ、お竹はヲ、うれしいと、言はんとしたが不意とこころづき、竹「わたしのやうなまをつちように、どこがよくてほれたのでずときけば、男「イヤ、此方さんの米をどぐとぎの腰つきは、又格別だからと云ふた、

○仕合せもの

内室「お松や、おまへは本當に仕合せものだよ、汽車に乗るときはいつもくも、二等にはかり載せていたらいでサと云へば、松「先に御

奉公いたしましたました邸ではいつも、奥さまと御一所に、一等ばかり
乗りましたよと云ふた、

○鳥目

お竹「長さん、おねがいだから一寸此の葉書をよんでおくれな、とこ
ろが長公も目に一丁字なし、そこで、長「イヤ、おやすい御用だが、
あやにく鳥目にかゝつてネと云へは、お竹心から笑ひだし、竹「此の
人は何を云ふんサ、鳥目は夜ばかり目が見えないのだよ、どこに晝
日中、長「イヤ、おれの鳥目は梟だからよと云ふた、

○はや起き

ある紳士が、朝はやく外出するに用事が出て、あしたの朝は、四時

におこしてくれど、下女にたのんで寝た、すると下女は、此の紳士
の起きぐせのわるいことを知つてゐるから、故意と三時におこした
紳士はらをたて、紳「あまり早すぎるではないか、下女「へい、まだ三
時でございますから一時間はれやすみなすつてお出でになつてもよ
ろしおとござりますと云ふた、

○作歌

生意気な下女が、ある時主人にむかひ、下女「旦那さま、いつもお客
さまが来出でになりますと、作歌「と云ふことをおつしやります
が、一体何のこととござります、且「ウム、作歌か、作歌とはナ、和
歌と云ふものをつくることよ、下女「どう云ふ風にしておつくりな

いますか、且「先づ萬葉、古今など、云ふものを種にして作るのよ、
下女」へいそして肥料には、どんなものをおつかいなされまするか
と云ふた、

○禪の川ながれ

ある商家の下女に、お春と云ふものがあつた、朝から晩まで、口を
うごかして居る性分で、喰ものと云ふ喰ひものは、一として彼の女
の毒味を経ざるものはないほどである、そこで店の小僧連は、彼の
女をめでなして禪の川ながれと稱して居る、ところがいつとはなし
に、此のことが彼の耳に入つた、性來おこり上戸のかの女のこと
あるから、忽ち店の長松をとらへて、下女「長さん、おめへらは私の

ことを、禪の川ながれと云ふそうだが、どう云ふので私のことを、
禪の川ながれと云ふのです、長「へい、お春さんのことを、ふんど
しの川流と云ふものがあるのですか、春」そうだよ、そのわけを云つ
ておきかせな、長「ふんどしはネー、杭にひつかゝると、離れるよ
だらふ、お春どんも喰ひにかゝると、はなれないだらふ、そこで
春さんは禪の川ながれと云ふた、

○たべて見れば分かる

内儀「さんや、尊には大層毒のあるものがあると云ふが、どうすれば
分かるだらふ、下女「新造さん、わけがありませんよ、内「へい、どう
するんげ、下女」たべて見れば直ぐわかます、

〇 儉約

ある金満家の下女が井戸端で、餘所の下女にむかひ、下女「私は此のお家へ御奉公しましてから、モウ七年になりますよ、それにね着で御飯をいたいたことは、唯の一度もありませんのど、言ふうしろで丁稚の長松、長「ウソ言つてらア、元日に田作三尾宛たへて居る、

〇 屁を放つた

ひとりの下女が、主人の前で用をしてゐて、ツイ取りはづしてプツトやつた、すると主人は大いに怒り、一つ鞭を加へてあどを懲らしめてやらふと、其の臀をひんまくつて見て、色の白くしてポツチャリと肥えふとれるを見て、急に妙な心を起し、其の罪をゆるして我が

命に従はしめた、ところが二三日たつて書齋に誦べものをして居ると、頻りに戸をたたくものがある、主人は戸を開いて見れば、下女「じや、何の用かとききは下女「ハイ、ツイ粗忽で、今一つ大きなやつをやりましたと云ふた、

〇 機轉

或る珍客が四五人あつて、主婦の應對至れり盡せりであつたが、おさんと呼んで用を言ひつけやうとして、覺えずツイと空砲をはなつた、するとおさんは「どうも奥さま、ツイ取りはづして失禮を致しました、御免あそばせと云ふてひきさがつた、お客がかへつて後、奥さまから大層なお禮があつた、

○巾着切り

十八九のしとやかに粧ふた令嬢に、二十二と見ゆる見るからたくましき下女がお供をして、浅草は観音さまへと参詣に出かけた、己に参詣を終つてから、公園を見物しやうとて第六區にまはつたが下女は頻りにお嬢さんに氣をつけ、あたまでのキンカン、キシに注意せよと云ふた、するとお嬢さんは、私は充分に氣をつけてゐるが、お前も巾着に氣をおつけと云ふたら、下女「イエ、さつきの間にツイすり取られましたから、それでお氣つけ申すのでござります、

○章魚

あるいたづらな若旦那、番頭久七の禿頭をふりたて、常々あそびの

邪魔するを怒り、いつか思らしてやらふところ、ろがけてゐたところへ、日本橋の河岸から、章魚のピン／＼生きてゐる奴を二三匹おくつてくれた、若旦那は是れで一つ、困らしてやらふと思ひ、久七、久七と呼びて、若「コレ久七、生きた章魚を見たことがあるか、久七へイ、先年大旦那さまのお供で、江の島へまいりました時に、若「さうか、フーンと言ひながら、大きな奴をいぢりまはして居たがひとつおきかしてやらふと、章魚のあたまたらしきところをひつつかみ、番頭久七のはげあたまへ戴せると、章魚めさつきからいぢりまはされて、はらをたて、居るところであるから、忽ち八本の手を伸ばして番頭のはげあたまから、顔へかけてからみつけた、章魚といふ奴に

からみつかれては、さうしてたまったものではない、ひつばればひつばるほど、八本足でからみついてはなれぬ、一本をはなせば他の七本がからみつきたやからみついてゐるばかりでなく、吸ふくべでもかけたやうに、吸ひつけられるのであるから、番頭のはきはき方、苦しき方と云ふものは、なみ一通りのことではない、若旦那はいたづらはして見たもの、まさかこんな大さはぎになるべしとはおもはなれた、うれから大さはぎして、章魚をひつばがさうとするけれども、どうして、ひきはなすどころか、ますますヤケになつて、吸ひついてはなれぬ、番頭はワア／＼さはぎ、若旦那は青くなる、丁稚も小僧もお、よ／＼てびやぶははははると云ふありさまには、實

以つて困つてしまつた、ところへ土蔵のなかから、何か手にもつて悠々と出て来た下女のお仲は、下「清どん、何を騒いでゐるの、清」お仲どんはやくきて、見ねへ、おもしろへよ、下「何だへ、清」ツム、番頭はげあたまへ手、章魚が吸ひついてはなれないのよ、仲「ハ、ハ、ハ、どうしたんサ、清」若旦那がネ、いたづらをなすつたのサ、なか／＼はなれねへでおもしろへよと云ふから、お仲が住つて見ると番頭め大汗をかいて、章魚とた／＼かつてゐるが、章魚ヤケになつてどうしてもはなれぬのだ、お仲はあ／＼と笑ひながら、仲「私はづしてあげまじやう、うのかはり、是れから感ばるとききませんよ、番「ッ、威ばらぬ、た、たすけてくれ、お仲どんたのむく」と云へ

ば、お仲は番頭ばんとうの側そばへどす、み、章魚たこへ手をかけ、あたすらしき
ところを、ちよいとどうかした、するとふしぎなことには、章魚たこの
入道にせうだうめ、八本はちほんのあしをはらりとばなし、ぐつたりとして死しんだやう
になつた、それから又手をかけて流ながしもどへ投なりだすと、章魚たこの又
モク／＼と動うごきたした、みんなはこれを見て、アツト云いふてその手
際そばにおどろいたが、あとできいて見みたら、お仲は銚子さうしの漁夫しやうふの子で、
ちいさい時ときから章魚たこをあつかひなれて居ゐるから、呼吸こきゅうを知しつてゐる
と云いふことであつた、そして章魚たこに吸すいつかれたときは、あのあた
まのやうなところを、ぐるりとひつくりかへすそうじや、そすれ
ば、章魚たこの入道にせうだうもれ入いつて、まるで死しんだやうに、ぐつたりと

してしまふ札せきである、

○機轉者

上京かみやま新在家しんざいけあたりを、三十はかりの男通おとこどほりりけるに、西にしの才さいよりとし
のところやう／＼二十を越こへたかどれもはるばかりの、品ひんのよき下
女おんなきたりしが、此この男おとこを見て、ほや／＼と笑わらひより、粗忽そこつながら其
方なたさまを、私わたくしとてころへお供申ともまをしたしどかたる、此この男おとこ常とこづねに色いろこのま
ぬにもあらねば、早速さつそく同道どうだうして、かの女おんなのところへゆき見れば、れ
き／＼の家居いへなり、やがで路みちぢの戸かどをあけ、屏風へうぶひきまはしたる座敷
へよび入れ、種々料理しゆくわうりをくはせ、さて最前さいぜんの女おんな云いふやう、ちかごろ
申しかねたる義ぎにおはしました候まうへども、わたくしことは、此この家いへの

お嬢さまの、たづねのはしために御座候。お嬢さまは、今年十六
になりたまひて、あちらこちらより、縁付のこのみ申しまゐりし
が、そもじなまに、一目あはせまいらせたく存じ、さてかく申し入
れたることに候まゝ、是非おあひ下されよとて、手とり奥の一間
へつれゆきけり。男夢かうつゝかなど、おもひながら、ふるい
屏風のそばまでゆきけり、かのおんなむすめの枕もとへよりていふ
やうは、もうしお嬢さま日ごろかゝせられますなど申す證據は、此
の人を御覽とませ、おかきなさると、あの人のかほのやうに、此
つらねが出来てみにくくなりますよといふた、あてこと、何とやら
は、向ふからはづるゝとは、よく申したことをわざにかうあれ。

○豆腐

下女だんく〜と出世して、めし焚火をつかふやうになり、臺所に出
て、主婦「コレ、さんや、何やら白いものが、盆の上のせてあるが
あれはなにだエ、さん」へ「エー、どれでござりますエ、主婦」それ、そ
こにあるものよ、エ、じれつたい、そこに半丁ばかりあるものよと
云ふた。

○茶かゆ

主人近所へ話しに往つて居るところへ、下女はせきたり、下女「モシ
旦那さま、茶かゆが出来ましたぞ、たかへりなされませと呼びにき
た、主人そこ〜にかへりて下女をよびつけ、主「これ外聞のわるい

大勢人のゐるところで、茶粥が出来たとは、氣のきかぬやつだ、今度からは、たとひ茶がゆであらふと、御飯が出来ました、おかへりなされといふものだから、よぐおしへておき、又近所へはなしに往つて居るところへ、下女が又きて、下「モシ旦那さま、御飯が出来ました、おかへりなされませとらふら、キ」ッ、飯が出来たか、ドレ行つて賢らふかと云ふた。

○お年玉

新玉の春、門には松を飾り、家内雑煮を喰つて居るところへ大黒屋福右衛門、御慶申し入れます、まづ御機嫌よく御越年なされまして、目出度ござりますと云ふところへ、金杓子を投げこむ、これはく、

御年玉かたじけなうござりますと云ふてかへし、さてくよい物をくれた、幸いおろしてつかへ、給仕して居た下女にやれば、下女は持つて勝手にゆき、これ長助どん、長助どん、東京では金杓子のことを、御年玉と云ひますかと云いた、

○灸

ある店の主人下女を呼び、灸を點させしに、たびくねとして外のところをやくゆゑ、主人大いに叱りければ、次の間へさがりてきて、下「これおせんさんおきなせいよ、客い旦那じゃアないか、たびくおどすから、すえるなとおつしやるんだよ、ひと土器おとした所が、五厘じやないかと云ふた。

○近縣旅行

お竹「お梅さん、近縣旅行でナニ、お梅」お竹さん知らないノ、おかし
な人だよ、お竹「たつて知らないんだもの、おしへて頂戴な、お梅」近
縣旅行でば子、お二階においでになつて子、お休みなすつていらつ
しやることサと云ふた。

○麥飯

ある商家の主人下女にむかひ、是れから飯時にお客があつたならば
ナ 麥飯でござりますすがいかいらたしやうとさげと言ひつけた。
そして其の日の晝飯時になると、ひとりの飯を出さねばならぬ客が
きた、下女主人のまへに出で、下「旦那さま、今日は麥の御飯でござ

いますか、いかいらたしやうと云へば、客はすかさず、麥飯結
構、私は牛得むぎめしが好きで、三里も住つて麥飯を食つてくるは
どじやと云ふ、そこで仕方なくあるまふた、又二三日すると、晝
めし時分にその客がきた、下女機轉をきかせ、下女「旦那さま、今日
は生憎ど、米の御飯ばかりでござりますすがと云へば、客はすぐ口を
はさみ、米のめしなら尙々結構じや、いつも五里もさきへ往つて、
米のめしを喰つてくるほどじやと云ふた。

○胡椒

いつも下女の雑炊たくのを見ては、ケチくさいどくさして居る客が
日暮にふらりとやつてきた、そこで下女は旦那に向ひ、下女「旦那さ

ま、菰野のまはきつい煎炊ざらいでいらつしやりますから、さしめ
けません方がと云へば、菰野と云ふ客は、「イヤ、此の雑炊に、胡椒
ははいつて居りませぬか、且「イヤ、はいつておりませぬ客」それな
ら一杯馳走になりましやうかといふた。

○奥様

容貌のうつくしう二十二三の美人が、ひとりの下女をつれてある町
を通ると、若者の共はきこへよがしに、生きた辨天さまだ、イヤ生
菩薩だ、どうして天人そのまゝだど、ほめちぎつてゐると、奥さま
は下女にむかひ、あの人達は何を云ふてゐるのだときかると、下
女もなか／＼の美人ゆる、自分をほめるものと早合點し、ナアーニ

奥様のことではありませんよと云ふた。

○奥の院

ある商家に兄は八に弟は六といふ、いたづらざかりの男兒があつた
いつも兄弟喧嘩ばかりして、ワア／＼泣いて居る、すると今度信州
からあらたに雇ひ入れた、二十四五になる下女は、ふたりの兄弟を
つれて往つて、何か見せるとふたりの機嫌がふしぎになをる、小
僧共はふしぎに思ふて、いろ／＼だましてきかふとすれども、ふた
りの兄弟は決して口を開かぬ、ハテふしぎと、いよく注意してゐ
ると、又喧嘩して泣きだした、今度こそはひとり的小僧は、そつ
とあとについて往つて見ると、是れはまたおどろいた、ふたりを下

女部屋につれゆき、まへをまくつて奥の院をおがませてゐるのだ、さてこそと大わらひをした、

○晝飯

金のない時に遠路して、やう／＼と知人の家に行き着き、晝飯の御馳走にならふとして、留主を喰つた時の落膽といふたら、経験せぬもの、夢想にもおもひおよばぬところである、ある貧學生は麻布仙臺坂下の知人のもとを訪ふた、主人は不幸にも不在だ、併して、晝食を喰はぬと、深川の大島町まで、ひるめしをぬきにして、コッ／＼あるきをせねばならぬ、そこでおもひきつて又ヌツと這入り、妻君といろ／＼はなしの末に、甚だ申しかねましたが、あそころが

さびしく、空腹でたまりませんから、どうか御飯を一杯おふるまい下されとたのんだ、妻君は同情ある人だ、エ、エ、おやすい御用でござります、コレ、さんや、御飯の仕度をして、森野さんにあけてくれと命じた、さんはハイといきよひ返辭をして、御膳だてをしてくれたが、飯櫃をあけてびつくりしたのは、そのからうばなることであつた、そこで先づ一膳はもつてやつた、するとお客はさら／＼とたいらげてしまつた、おさんはれかへなさいと云ふことは出来ぬから無言だまつてゐる、お客は喰つてしまつても、おさんがかへると言はぬ、マサカもう一杯ときめるぬけにもゆかぬ、そこでれ客は、れさんにむかひ、客此のお茶碗は、まことによいお品であるが、

いづれにてお求めなされましたかど、茶碗のソコを見せるやうに
した、するどおふんは、さやうでござります、昨年此のおはちと共に、
銀座で買ひ入れた品でござります、おはちのソコを示した、時に
取つての機轉じや、

○夢見

よろこばしい夢を見たから、きつとあたるぞ云ふので、およしなど
いと云ふのに、無理に勸業債券を買ひ入れたら、どうだい、花籤に
もあたらぬでないかと、頻りに内室さんが愚痴をこぼせば、下女
はもつともだぞ云ふやうなかほつきをして、下』さうでござりました
か、私のれやぢはまた、キツとあたらぬと云ふ魚屋のうけあいで、

鯉汁をたべましたところが、すぐにあたりまして、私共も奉公する
身分とはなりましたと云ふた

○又格別

上品な新婦を疎外にして、肥大な下女になづめる人があつた、その
朋友共は見ともないとして、君の物すきにもこまる、鯉こくの極上品
なものを棄て、何も豚のあぶら澤山を味はずとも、よさ相なもの
じやにと云へば、その人笑ひながら、どうして、君のさう云ふ
のは、豚の眞味を知らぬからじやと云ふた、

○述懐

共同水道の前でとなり、下女にむかひ、マアきいてくなんせぬの

人はいくら、泣いてたのんでも、裕のしたくもしてくれませんがど
云へば、下女も、サウでござんす内の若旦那も、眞正に御情で
なりませんよと云ふてゐるところへ、番頭の清七があたまをひよい
と出すと、あの人のやうに親切でくれ、ばと云ふた、

○内のお松ごんばかりは

そよふく風に終日の汗をぬぐはせ乍ら、近所の番頭が四五人よりあ
つまり、頻りに下女の棚れろしをしてゐるところへ、十七八のキツ
トした下女が、坊ちゃんをおんぶしてぶら／＼その前にきた、する
と其のうちのひとり之急にコトバをあらため、おらどころのお松ご
んばかりは、その例外たらふと云ふた、

○臂鉄砲

日本橋は横山町に、雇人の四五十人もおく大店がある、とこで新來
の下女は、色白で年若で、且つ上品なところがある、そこで我射て
れとさんと、それは／＼は競争してゐるが、恐れも／＼も臂鉄砲を
喰されてゐるやうだ、ある晩に臂鉄砲連が六七人よりあつまり、君
もか、僕もよ、甲介さんもか、乙吉どんもよと云ふやうに、互いに
失敗談をやつてゐると、ひとりクツ／＼と笑ふものがある、ハテナ
とその顔を見れば、壬三と云ふ利發ものである、甲「壬さん、何がお
かしいんだよ、壬」たつてみんなが盲目からよ、乙「めくらだ、どうし
て、壬」お花どんには〇〇があるではないか、一同「へい、ソレヤア知

らなんだ、一体だれたへ、王「斯く云ふ我と云ひたへが、實はうちの若旦那で、一同「ヘー、どうしてそれを知つたへ、王「僕も實は御多分にもれん方サ、ところがやうく二三日前にいたり、たしかに判然ときはめがついたのサ、こ「そう云へばおいらにも思ひあたることがある、丙「私も感づいたことがあると云へば、典之助と云ふ小僧は横合から、若旦那でもだれでもない、此のうちの無言でかんがへてゐる人が、その相手なんだよと云ふた、

○ 災 難

ある朝のことである、おふよと云ふ肥大な下女が、へんなこしつきをして、御新造の前に出で、へそをかきながら、下女「御新造さん

どうかおひまを下さりませ、新「だしぬけにどうしたのサ、それに泣いてサ、だれか又からかつたネ、下「ハイ、だれだか分かりませんが、昨夜私の寝て居ますところへ、忍び込んでまいりまして、ハイ前へ火をつけてやいてしまいました、新「エッ、どこをやいたのサ、下「前でございます、一本もなく焼けてしまいましたし、大變に火ぶくれになりましたと、泣きながら訴へれば、御新造さんは烈火の如く怒り、何んと云ふいたづらをするのだらふ、是れは此のまゝにすござれません、おきよや、勘忍しておくれよ、今に調べて見て、キツトかたきをとつてやりますと、それから番頭を呼びよせ、そのわけをはなし、丁稚小僧のこらすを呼びよせ、御新造さんがかしらとなり、

きびしく問いたらして見ても、どうもそのいたづらの本人がわからぬ、そこで旦那までその席にのみみ、きびしく吟味するけれども、どうしてもわからぬ、旦那も御新造も、番頭もあぐみはてゝゐるところへ、當年八ツになるいたづらざかりの若旦那が、チヨロくど出でゝきて、みんなの叱られて居るのを見てゐたが、だしぬけに母親のところへかけて往つて、小「カーチャン、ゆるして頂戴よ、きよに火をつけたのは、坊だよと言ふのだ、新「ナニツ、坊だ、なせ坊はそんなおいたをしました、小」だつて毛がモジャクはえて、火をつけて見たかつたからサと云ふだ、すると満座覺えず吹き出してしまつた、

○又

ところは京橋の築地二丁目に、西洋小間物をあきなふて居る店があつて、随分と繁昌する店であるが、下女にれ萬と云ふて、すこぶるつきの意地悪があつた、たゞに隣り近所からいやがられるばかりでなく、店の番頭や小僧にまで、目のかたきになされて居る、それと云ふは、主人の意を迎ふるにたくみで、御新造さんなどの信用と云ふものは、實に大したものである、店の小僧に、徳太郎と云ふ腕白ものがある、おまんめ何故か、之れを目のかたきにして憎んでゐたのである、夏のゆふべに、臺所の庭で大さはぎがはじまつた、それはおまんの洗足湯のなかへ、何ものか蕃椒を入れたものがあつたから

である、おまんは蕃椒の入れであつたことを知らぬから、大切なところを洗ふと云ふと、サア大變だ、ある大切なものが、こはれるやうにいたみ出したと云ふのである、のみならず、大層にはれ出して醫者よくすりといふのはぎになつたが、ド、のつまり、先づ太平無事におさまりて、さばぎがなくなつてしまつたが、いたづらものは知れずにしてしまつた、徳小僧ニヤリとうすら笑つて云ふ。おいらのすることが、どうして人に知れるもんかと。

○妙計

近頃は辻便所が不足になり、住來にて大小便の催ふして来たときは、實に、迷惑を感ずるものが多い、そこである金もおけを上手にす

る人が、あるところの四辻へ、立派に大小便所をこしらへた、すると忽ち競争者が出てきて、なか／＼利益を思ふまゝにすることが出来ぬ、それと云ふも、立派な便所がひかひあつて居るからである、それからいろ／＼とま／＼に工夫するけれども、どうも妙計がない、すると此の家は奉公して居る山出しの下女は、ニッコリと笑いながら、下「旦那さま、私がおうちの便所を一つはやらしてあげましたら、下「おまへがか、それや不思議だ、どうするんだ、下「イエ、申されません、ハイ、あとでおはなしいたします、そして今日一日やせさがりいたしてきますから、どうか、お暇をいたしかして下さい、下「ア、よろしい、往つてお出でて出してやつたが、ハテ、奴め

どんな工夫するだらふ、田舎もので馬鹿なやうだが、どうして喰へぬ奴だからなど、かんがへてゐるところが、サアどう云ふわけか、其の日はお客のあること、日ごろに十倍してゐる、まるで便所は順序をもつて這入るといふありさまだそこで、旦那は、妙々、奴どんな工夫をしたらふ、これでは今日一日は、一ヶ月と對するやうな勘定になると、ホク／＼よろこんでゐる、その日も夕刻となると、やがておさんはかへつてきた、うして旦那にむかひ、下『さうございりました、旦那イヤ、来たとも来たとも、今日一日はいつもの一ヶ月ぐらいにあたつてゐる。だがどう云ふ工夫をして、あんなにはやらしたのだ、下』へ、へ、へ、へ、あしきでございませう、旦那實にまし

ぎだ、どうしてあんなにはやらした、褒美をやるからおしへてくれ、下『それではたしへましやうか。實はネ旦那、私が一日むかふの便所に這入つて居て、人がくればエヘンと咳をやつたのでございませと云ふた、旦那も之れをきいて、オツヤオヤ／＼と言はざるを得なんだ、

○ちんぴ

小僧『お竹どん、どうするんサ、そんな蜜柑の皮なんか拾い集めて、竹』もつていねへことを言ひなさんな、之れをばしておけばネ、蚊ゆゑにもなるし、又生薬屋にもつて往つてうれば、ちんぴといふタスリも取れますと云ふた、

〇 杏仁

小僧「お梅さん、おめへ随分と梅の夕子を拾つたネ、一体何にするん
サ、梅「これか、これはネ、此の外のかたい皮を破つてネ、中の實は
かり薬屋へもつて往くと、杏仁と云つてネ、よいお金になります
よ、小僧「フム、そうか、そんならおいらも之れから拾はふや、

〇 小説家の下女

ある小説家の内室、めしたき下女をかゝえるどて、うの女にむかひ、
こちのうちには、上は旦那さまとわたしばかり、下はたゞ其方ひとり
ゆる、御飯をたいて、くれてなにもかもされいにしてくれさへすれ
ば、外になんにも用はない、そして旦那さまは、アレの通り、一

室にゐて書物ばかりよんで居らるゝ、お手がなると、烟草の火か、
お茶などもちて往くばかりじゃ、何も外に六かしいことはない、
すべてのことを言ひきかして、いよく召しつかふことゝなつた、
そして女の方も、段々なじんできて、此様よいうちはないと、よる
こんでつとめてゐた、ある時いつもの通り、奥で旦那が手をたけ
るゆる、下女アイと返辞して烟草の火と、茶台に茶碗をのせて持ち
ゆきけるが、しばらく過ぎて、青ざめたる顔色にて、勝手もどへき
て内儀にむかひ、下女「内室どうぞ、私においとま下されませ、内室
「どうしたことじゃ、折角なじんで、そちもつとめよいうちじやとい
はるゝし、此方もまた氣に入りて、いつまでもつかはふと思ふてゐ

るのに、ママなせいとまを取るのが、下女』どういたしまして、
わたくしにはつとまりませぬ、どうかおいとま下さりませ、内』サテ
し、氣の毒なことをいやる、しかし是れにはなんぞ譯があらふ、
そのわけきかねば、ひまをやることは出来ぬ、下』ハイ、それではそ
のわけを申しまじやう、いつも旦那さまのお手がなりますれば、お
茶、おたばこの火をもつて参りますのに、直にお取りなされます、
それに今日はどういふわけやら、おたばこの火も茶も、直におど
りなされず、だまつておいでなされましたゆゑ、いかいと存じまし
て、お茶もお火もおそばにすへて、おいておつきに立つて様子を見
てゐましたところが、旦那さまのひとりごとにおつしやるには、

うしてもあの女は、いかしておくことは出来ぬ、今夜は是非殺さね
ばならぬと言はれました、ですからおいとまを頂戴するのでござり
ますと云ふた、内』ホ、ホ、ホ、それでかへ、それなら心配おしで
ない、それは小説のうちの女を、殺すやうにかゝねばならぬとおつ
しやるのだよ、オホ、ホ、ホ、下』それでは、御本のうちへたか
きになるのでござりますか、わたくしとしましたことか、ママ、』

○柔術家の下女

十八九の、水もしたゝるやうな、小間仕ひ風な女中が紫色の小さき
服紗つとみをかゝゑて、三越呉服店から出てくると、待ち設けて居
たと言はんばかりの、二十四五に見ゆる小さなつばりとした風体をし

てゐる男が、ちと側へよつたと思ふと、やにはに女中のつゝみを奪ひ、矢を射る如く奔り去らふとした。すると女中は無言のまゝで、飛鳥の如く逐つかけたが、何んと云ふ生地のない男であらふ、いきはひかけて走るうしろから、女のために脊中をどんと突かれ、四五間さきへまでけしとんで、不躰裁にぶつたをれ、女に横面をいやといふはどなぐられた上に、其のつゝみを奪ひかへされ、ザマア見ろの棄言葉をきくまもあらばこそ、鼠の如くこそく〜と逃げ去つたことである、さけば某柔術家の小間づかひで、手取を評判の女である。見物のひとりおいらもひとつなげられて見たいもんだ、

○感ちがひ

ある商家に三十あまりのお多福な乳母と、十七八のみめよき小間づかひとがあつた。番頭の丈八といふ四十男が、此の小間づかひに思ひをかけ、色々親切心を見せて居たが、ある時乳母と小間づかひとが炬燵にあたつてゐるところへ、どうもさむくてかなはん、ひとつあたらしして下されと炬燵のうちへ手を入れ、小間づかひの手とれもひちがひ、乳母の手を握りしめ、以心傳信と出かけたところ。思ひの外上首尾の返信かひひいた、丈八ソク〜とからだをふるはしてよろこび、その夜更けに晝の情約に基づきて、小間づかひの寢床へカ〜ノツをさめこんたところが、あれだれか人がとこゑたてられ、丈八小聲にて、約束がちがふ、約束がちがふと云ふた、

○茶碗で三杯

あるところの下女が、はげしく腹が痛むといふて、昨日の晝ごろから寝て居る、そこで今朝は出入のお醫者を呼んで、御新造がたちあひで、診察してもらふこととなつて、醫「たべものはどうです、下」ハイさつぱりいたゞけませんので、お粥にしてたべて居ります、醫「ム、それは至極よろしい、してどのくらいたべられます、不、ハイ、昨日などは、一升ほどおかゆにこしらへまして、やうく茶碗で三杯、醫「ウム、それはこまりましたナ、三杯ばかりたべるやうでは、下女「イエ、たべたのではございませぬよ、たつた三杯はどうしてもたべられませんで、ハイ遺しましたのでござります、醫「ハ、ハ、ハ、

、それでは大丈夫だ、

○やぶにらみ

れ松「おうめさん、おまへ頃日大層にめかすが、何かあてがあるのか、お梅「いやなお松さんだネ、ナニあてかあるもんかネ、松「イヤ、おまへそれはうそだ、わたしの目でにらんだ上は、決してはづれつことはないよ、レコか、拇ゆびを出す、梅「本當におかしなお松さんだおまへじやないし、松「あたし、あたしには疾からあるサ、あるものゝ、二世かけてと云ふ人があるサ、だからおまへのもさくのよ、梅「ハイ、御馳走さま、晩には何かおどつて頂戴なといふてゐるところへ、この若旦那が、ギシ／＼といふ絹ぢはりをばせて、そのまへ

を通つた、ね梅は急に衣紋をくぐらふたり、特別な笑顔をつくつたりして居た、お松は目さどくこれを見つげ、松「おうめさん、お前の病根はモウ分つた、梅「ナニ、私の病根ッ、ハイ、どうわかりました、松「ねまへのお化粧は、ワじるしのためだらふといはれ、初心なる下女のおうめは、バツト顔をあかくすることを禁じ得なんだ、ね松はさらにとどばをつぎ、松「モウ、ねなさを蒙むつたのか、梅「イヤなお松さんだ、松「どうしてそんなことになつたのサ、懺悔れしよいいだらふ、若しまだなら取りもつてやるからといはれ、梅「まだともサ、そんなことはありませんよ、松「それでは取りもつてやらふそして若じるしの方から手をだしたのか、又お前の方ではかり氣を

もんでゐるのか、梅「實はホ、若旦那はホ、いてでもく、わたしの顔ばかりを見ていらつしやるからサ、松「ウム、分つた、そして目でしらせるとか、ニツユリと笑ふとかなるのかへ、梅「イエ、いつでもまじめで見えていらつしやるは、松「それではおうめさん、ねまへのおもひちがひだよ、若旦那はどうして、おまへやわたしらに手をだす方ではないよ、梅「エ、一、どうしてそれがわかるの、松「ホ、ホ、ホ、若旦那はやぶにらみであらつしやるよ、おまへを見てあらつしやるのではない、外を見てあらつしやるのだよ、若しウソとれもはい、お前を見てあらつしやると思ふとき、馬鹿まねをして御覽、知らんかほしてお通りになるからと云ふてゐる折柄、

若旦那がこちらを見つめて通られた。お梅はそれと、舌を出したり、ベツカニーをやつたりして見たが、そのまゝ通りすぎられた。松「どうだれうめさん、梅」わたし大層損をしたわ、とため息をして居た。

○これにじやうか

生れは賤しき水呑百姓の娘であるけれども、天のなせる美はかくはれぬもので、横山町は或る呉服問屋につとめてゐるおさんは、御飯たきには勿体ないほどの美形である。だから下におくまいとの世話すき共は、いろ／＼さま／＼なまねをして、おさんの御機嫌にかなふとしてゐる、ある時乳母はおさんにむかひ、乳「お前も今のうち

に、身をかためるはどうだエ、ひとつでも年の若いうちに、身をかためるものだよと云へば、さん「たつてネ乳母さん、誰にしてもいか分らないんだもの、乳「おまへの心のうちで、一番よいと思ふ人にさめる、さん「みんなよいとれもふのたよ、乳母「オヤ／＼

○我慢

甲「世の中に、二た色加味すれば、何んでも喰れぬものはないと云へば、乙「それでは火を喰つて見よと云ふ、甲「造作のないことだ、乙「どうして喰ふ、甲「醤油をかけて喰ふのよ、乙「金や石はと云ふ、賣つて喰ふと云ひあらず居ると、下女はかたはらから口を

だし、甲三さんのおつしやる通り、喰はれないものはございませぬよ、乙』どうして、下』わたしの父親などは、田畑も山林も、みんなたべたり呑んだりしてしまひましたと答へた。

○さきでも言つてる

ある家の下女が、となり近所の悪口を、きこへよがしに言つてる、新』これ、さんや、餘所さまのことを其様に悪口するものでもりませんと云へば、さん』たつて御新造さま、さきでも言つておりますからと云ふた。

○南部種

ある高等官の家にて、正直でつかいやすしとて、ワザ／＼南部から

一人の下女をかゝえしに、あくるある夫人の起きいづるを見、下女』おかみさん、おはやうがんとやつた、おくさまは顔をまつかにして、夫人』これはしたり、なんといふことばづかひじや、そんないやしいことばは、言はぬものじや、おくさま、おはやうございませんと云ふもんじや、なんでも女といふものは、おの字と様の字をはなさぬやうに、丁寧にいふものじや、下女』ハイ、夫人』そしてことばはなるべく少くしておしやべりをせんやうにせねばならぬ、そこでむかしの人は、口を鼻のやうにせよと云ふてれる、下女』それは、ア、とんだたべらばうらまでがんと云ふた。

○嗅い鼻血

番頭「ね福どん、お福どんちよいと紙をだしてくんねへ、福「なんで
す番頭さん。番「イヤ、はなぢがどんく出てこまる、何か紙をく
んなよ、福「ハイ、お待ちなさいよと、自分の袂をさがして
たが、はいと云ふてさしたした、番頭はありがとうと、クチャク
になつてる紙をひろげて見て、番「おめへもはな血が出たに見える
ネと、はなのところまでもつて往つて、番「ハテ、これは又くさい
はなぢだと云へば、ね福はギョツとして、福「ヤ、すまなかつ
た、番「ア、一件もんか、道理でくさいとれもつた、

○めらしこく

東京から始めて秋田縣に轉任した參事官の奥さまが、めらしこく

といふ女の呼びを多をき、東京から同道せし小間づかひをよび、
夫人「東京にはいわしこくといふものがあるが、秋田にはメラシコ
くといふものがある、どんなものか呼んで御覽と云はれ、ハイと
いふてよびこむと、十七八に見ゆる田舎風な女が、アイと云ふて這
入つてきた、小「メラシコをもつてきて、女「アイ、わしやメラシ
コでござります、小「イヤネ、おまへのうるといふメラシコといふ
ものを、もつてきて見せて下さいよ、女「アイ、そのメラシコはわ
たしで、小「ハテわからないのか、女「アイ、わしやヲリぬしで、小「ハテ
メラシコを賣らないのか、女「アイ、わしやヲリぬしで、小「ハテ
わからない人だ、うるぬしならもつてきて見せよ、女「アイ、こ

へにきてゐるんで、小「そんならお見せな、女」さつきから見えて
 られるんでと、共にさつぱり分らぬので、ホト／＼困却して居ると
 ころへ、旦那を送つて空車をガラ／＼ひいて戻つてきた出人の車夫
 がある、そこで小間づかひは、小「秋さん／＼、ちよいとおは急ぎ
 でどいへば、車をガラ／＼とひつばつてきて、秋「奥さまがどつか
 へお出ましでございますか、小「イエ、そうじやあなくつてよ、秋
 さん、メラシコツてばどんなもの、秋「ナメラシコツと言ひなが
 ら、かたへに立てる女を見て、秋「おめへか御奉公したいと云ふの
 は、女」さうでがんす、わたしで、秋「ウム、さうか、どこだ、女
 「近在でがんす、秋「メラシコをおよびになつたんですか、小「ア

、奥さまがよんで見ろとおつしやつて、秋「それではおやどひに
 なりますんですか、小「イヤナ秋さんだ、何を雇ふてんだよ、秋
 「メラシコでサ、小「オヤ、それではなんですメラシコと云ふの
 は、秋「ねえろいた、おそのさんは何んだとおもつてよんだんで
 す、小「たべものとおもつてサ、秋「ハ、ハ、ハ、ハ、大わらいだ、
 オイ、ねへや、おまへをだへてしまふんだとサ、アハ、ハ、ハ、ハ、
 小「秋さんは人がわるいよ、めらしこてばどんなものサ、秋「ハ、
 ハ、ハ、ハ、おどろいたネ、小「おどろかなくつてもよいよ、一休な
 んですよ、秋「下女のことですよ、おまんまたきをもメラシコと云
 ひますらう、小「エツ、御飯たきや下女のことですつて、オホ、

、、、、、ア、、、、、、、、

○豆腐一丁

仙臺から始めて東京へ出た奥さまが、チヤキ／＼の東京兒を下女におき、奥『およしや、お晝のお菜に、豆腐一丁買つてきてくれ、よし』ハッ、一丁でございませうか、奥『ア、一丁で足りるだらふとて、一圓の札をだし、細かいのはないから、之れをくづしてと云ふのである。そこでおよしは、豆腐やにかけつけ、一丁を丁稚にもつてきてもらつた。よし』ハッ、往つて参りましたと、一はこの豆腐をだせば、奥さまはチロリとおよしのかほを見られ、奥『これは何丁あるの、よし』ハッ、一丁でございませう、奥『それでは此の一きれ

は、よし』ハッ、ひとつと申します、奥『オヤ／＼、此様にどうしやう、よし』東京では、一丁といへば是れだけでございませう、一丁とおつしやいしましたから、實はあまり多すぎるとおもひましたが、又ひとつとしますれば、たつけの實にしても足れませんか、それで一丁買つてきましたと云ふた、

○無脈

奥さまが脈を引かれたとて、たのみつけの醫者を呼ばれて、見てもらはれたあとで、夫人『おきよや、おまへきのあから、氣もちがわるいと云つてゐたが、ついでに脈を見ていたもいではどうかと言へば、下女』どういたしまして、私、脈情に脈がござりませうやうやと

云ふた、

○青物

下女「八百参さん 大根と牛蒡を見せてください、青物へい、長いところにしてやうか、細いところはしましやうか、うれともふとくつてみぢかいのにしましやうかときけば、下女「それは長くてふといのはよいよと云ふた、

○まるで生む

あるところの下女が、身もちがわるくて、たれかれの差別なく、平等に施しをしてやるといふ博愛家である、御隠居のお老婆さまがひさく心配され、ある時そばちがへよんで、隠「これさんやおまへの

やうに不身もちでもこまる、若し半産でもしたらどうしますと云へば、下女「いえ、御心配下されますな、半産などは決していたしません、きつとまるで生んでお見せ申しますと云ふた、

○鼻をそぐ

ある商家の番頭にみめかたちよきはしたためと夫婦やくそくせしものありしが、あと半年をつとめおはれば、外勤の身となり、始めて一家をもちて、たのしき月日をくらさんと一言ひかはして居りしところ、不斗したやまひが元となり、以ての外わづらひとなり、存命不定と言はるゝやうになりしかば、ある夕その女を枕元に呼びちかつけ、私も此の分にては、二三日中に冥土の人となるべし、あゝお

名残おしく候ず、こなたさんのやうな美人は、我がなきのちは、いかなる人にかそひたまふらんと、是れのみ心にかゝつて候と云へば、かの女はなみだをばらい、そはれ心やすくおぼしめせ、若し自然のこともあらば、かみをそりて、後生大事とむらひ申し候はんと云ふ。番頭きゝて、それは満足いたして候、さりながら、かみはそりて復たはへるものなれば、おなじくは我等がいきの通へるうちに、そもこの鼻をそいで見せたまへ、さめらば我が身につきまゝほどのものは、株券公債をはじめ、紙幣銀貨のはてまでも、ひとつも残さず、そもじにまゐらすべしと云ふ、かの女、それはやすきことにて候、人は何と言は、言へ、笑は、笑へ、そなたさまへお心やすければ、

此の上のたのしみは御坐なく候とて、みづから鼻をそいで見せる、男も満足せしかほつきにて、此の上はよしや死ぬることありても、心にかゝる雲は、なくて候とて書おきなどをこまぐと認め、かの女の手にわたし、今は死するを待つばかりなるが、おしぎなことは、此の二三日來、ちと食がすゝみてき、心もかろくなり元氣もなかしく、にさかんになりしと云ふておるうちに、やがで本復して、さかくめでたい事とて、人々ひしめくところに、番頭つくづくおもふやう、これはこまつたことが出来た、一生此のはなそげ殿を、そばにおいて見ねばならぬ、どうしてそんな馬鹿げたことなるべきぞ、おもてだつて夫婦の縁を結ばぬをさいはいにし、是れば夫婦の

縁をきるにしかずとて、ある時かの女をちかづけ、ちかざる面目もなきことにて候が、そなたのはなつきを見ては、いのち生きのびてうらめしくねはれて候。とかく申しかねて候へど、これまでの縁とあきらめて、他に縁づいてたまはれかしと云ふ、かの女きゝて、これは、おもひもよらぬことをうけたまはるものかな、生れつきて此のはななりとも、此の月ごろのなさけをねもいたまは、さる薄情のことはよものたまはれまじく候。まして此のはなはうなたのおのみみによつてのことなれば、よしや少しばかり醜くなりしとて、かゝるあさましきことは、のたまはれまじく候と怨りければ、番頭きゝて、理非にまがふことはなく候へどもたゞいままで

のなさけをおもはれ、是非とも縁をきりてたまへかしと云ふ、女はらにすゑかね、委細のことをどころの地頭ぢちゆうに申しあげれば、やがて兩方めしいだし、おたづねなさるゝ、そのとき男まかり出で申しけるは、最前女どもの申しあげ候とほり、一々いつはりけこくなく候、されど我等わかきものゝことにて候へば、あのごとく成りはて候もの、朝夕見候はんこと、いかに迷惑めいわくのことに候、されば縁をきりて、いな縁をむすばでこのまゝ分れ申したく候あひだ、さやうおほせつけられたく候と申せば、奉行はしばらくのあひだ、沈思熟考して居られしが、急にかたちをあらためられ、かの男のはなをそぎとり候へと命せられた、かの番頭きものをつゝし逃げ出たさんどす

るところをもらへられてそのはなを、ズンとそいでかの女にとらせ
此の上はたがひのうらみもあるまじきごとて、おつたてられ、すこ
くどかへりけるが、かの番頭おもひけるは、此のやうな風体にな
りては、よき女を女房にもつこともなるまじ、ちよいとあしき心
出だせしため、かゝるあさましきかたちとなれり、此の上はた、
元の女よりをもとせし、ひとつになるより外に道なしとて、はなそ
げふたり手をひきてかへり、それより五百八十年まで。

○團子

おどけたる番頭と小僧と下女と三人よりあひ、芋坂の團子十錢ばか

り買ひもどめ、何か秀句を言ひだして、之れを賞断しやうではない
かどて、第一番に番頭はきよもりの、長刀と云ふ、なごときけば、
いつくしまと云ひて、いつくしをとる、小僧は、佛のつふりといふ
なにぞときけば、みくしと云ひて、みくしをとる、下女は、いしや
の本尊と云ふ、なんぞときけば、やくしと云ひて、やくしとりしと
云ふ、おもしろきたはむれならずや、

○里がへり

三年の下女奉公むなしからで、ある商家によめいりすることを得、
大いに親ざとに面目を施せしが、あるとき里がへりするとて、先へ

あん内のために先づ女房をやりける、舅満足して、さまぐの用意をする、さてむすめを近づけ申しけるは、そちのには何にても藝があるかといへば、むすめききて、たいことが上手じやが、みなかねをもちて、ならひにくるといふ、それは心にくいことじや、さらばやくしやをあつめよとして、方々よりそれくの藝者をあつむる、さてここ迄のれ出でて、さかづきもしばくめぐりてのち、舅申されけるは、むことのたいこ承はりおよびて候何か一つあそばせとて、たいこを出す、大御酒にたへるひて候へ共、御所望をつかまつらねば慮外に候はとて、そといたさうとて、大かたぬき、かたばちおつとつて、なむあみだくと、六ごいぶ像をたかぐと出しければ、座

中の人々、是れはくと、興をさましけるとなん。

〇三品

あるもの火事にむひけるを見まひにゆさければ、そのうちの女房申しけるは、何にてもおしきものは御座ないが、こきん、まんねん、いせものがかり、是の三いろをやきたるは、何よりもおしきと云ふたるよしを、友だちのところにてかたり出し、さてくやさしきとどかな、さほどなる身の上にもなかつたが、さだめていにしへよき人のむすめか、又は名ある人のかゝれた物共にてあらうと、此の女房をことの外にはめければ、此の友だちの女房つくぐとて、

我は下女より成りあがりの女房なれば、折にふれて口やしきことのみ多し、我が身もひとつ家をやきて、人にほみられてやらんとてあやまちの上しにて、其の夜家に火をつけ、ことごとく焼く、さてあくる日知人諸親類あつまりて、さてくながくしきことかなといひければ、かの女房こゝろといひけるは、何にても別におしきとれもふものもないが、こぎぬ、まごどもいせすりばち、是の三いろがれしいことじやといふて泣いた。

○洗 湯

ある時井戸端に、二三の下女のよりたるとき、ひとりの下女のいふ

には、今度雁治郎が上京したさうなが、一日でも、あんな殿御に添ふて見たいものじや、今ひとりとは、わしののぞみは、大きな湯屋を、東京のまんなか立て、東京中の男といふ男を、みんな入れて見たいものじやといふた。

○茶 道

ある人が友だちにむかひ、頻りに茶道坊主茶道坊主と言はれた、するとそばにてきゝゐたる人のいふには、茶道といふものではない茶道といはねばならぬ、尤も茶をたつものなれど、むかしから斯く言ひならはしてきたりたれば、詮方なし、惣じて茶にはさといふて

とばを用ゆるものじやとはなされた。するとかたはらにわたる利口
ぶる下女は、へい、さどちやと申じことでありますと、笹屋の三郎
兵衛と申しますを、茶々屋の茶郎兵衛といふても、大事ありません
かど云ふた。

○長刀

剛情ものと剛情ものと、あたりよりあひけるころへ、門前をはなし
鳥はなし鳥と賣りあるく、ひとりがいふやう、あのつばくらといふ
鳥はどびうをになるといふことじや、ひとりがいふ、イヤ、それは
大きなうそなりといふて、たかひに赤すぢをたて、いがみぬふて

るどこへ、わるじやれする下女が入りきたり、むかしよりも、山の
いもがうなぎになるの、雀油中に入りてはまぐりになるのと申しま
すけれども、いまだ見たことはありませんから、何とも申されませ
んが、併し世の中には、れもしろきことのあるものにて候と言はれ
あたりは口をそろへ、していかなるおもしろきことかありしときけ
ば、さればにて候、私が此の二十五日に、龜井戸の天神さまへ参詣
いたしましたか、そのまいますとき、はちくのかはごうり一足、
二錢にて買いとり、はいてまいましたところ、宿へもどりて見ま
すれば、いつのまにか長刀となつておりましたといふた。

○ 鳶と烏

うつけたる下女が、何か買物して味噌汁に入れ、いちやくあるきしてもどつてくると、となりの朋輩の下女が、大どろたて、おさん、何を買つてきたヨ！ときけば、ア、こゑがたかい、ひきく〜といふ、こちらは、何事と、忍びあしにあゆみより、なんだへど小どろできけば、むかふも小どろにて、鳶や烏にきかれてはこまる、此れは油揚げやほほどにといふた。

○ ふじ三里

何故ともなく、ふら〜とむづらふて居る下女ありしが、ある時醫者の申さるゝには、くすりばかりにては、なう〜早く治しがたかるべし、是れはふじ三里におもろうさま灸をすえられよと云ふ、下女仰天して、かゝねておねがひ申すべしとて、そのまゝ宿にかへりしが宿にかへりてのち、よて〜うつけたる醫者も有るものぞ、なんば病ひがなほるとて、富士はさ〜およびたる大山なるに、三里があるだ、おもろうさま灸をせよとは、そもやそも、もぐまがつづく物かといふた。

○ 這出の下女

すべて成りあがりものは、自分ばかりをえらきもの、やうにおもえて、人をばいともおもはぬものが多い、是れは禮儀と云ふものを心得ぬから、おきるところの病みである、ある家で、質朴でかざりけがなく、よいとし、田舎から這いたしの下女をかゝえた、自分の旦那さま夫人より外に貴きものはないところへゐて居るかの女は、とんな立派な人に對しても、お家の旦那さまが、おくさまがとやらかすのである、そこでなくさまがある時かの女を膝もと近く呼ばれて、夫「これさんや、よろさまのお方に對しては、決してお家の旦那さまが斯おつしやりましたの、おくさまがあつたしやりましたの、自分の力をあがめて言はぬものか、なんでも自分のうちの人は、卑下

して言はぬと失禮にあたりますと言はれた、おさんは委細かして、まり以來は氣をつけることゝなつたが、二三日過ぎてから、おくさまのお供をして、あるところに往つたが、おくさまはさん命じておとなはせた、するとうちからはいとやさしえこねて、おなたさまでござりますと出てくると、おさんはあとを寄りむき、たくさまをゆびさし、あいつめでござりますといふた。

○又

仙臺地方の人は、すべて返辞をするに、ナイといふコトバを用ゆる東京にて、ハイ、又はハイといふにおなじだ、同地方から這いだし

下女が人によばれたとき、ナイといふ返辞をする、そこでれくさまは
これさんや、人によばれて返辞をするときは、ハイとか、ハイとか
都合のよいやうに返辞をなさい、おまへのやうに、ナイといふては
あまり見つともないではないかと言はれて、ハイ〜以後氣をつけ
まするとして、すべてに注意するやうになつたが、ある日旦那のど
ろに客があつて、これさんやさんやと急によばれナイと返辞した
が、ハットれもつて、ハイと返辞し、これではとおもつて今度はへ
いとこたへた、それががあまりにはやかつたために、ナイ、ハイ、
ハイときこえて客も旦那も、ふきださずには居られなんだ、

○又

田舎にては、野ら仕事に髪の上でされるために、女はすべてアネサン
カプリをやる、それからさらさら不都合だから、年中たすきをか
け、尻をはしよつて居る、東京のさるところで、ひとりの這だしの
下女を雇ひ入れた、至極よくはたらくれども、どうもアネサンカ
プリをやり、タスキたすきがけにて、尻をはしよつたまゝ、人とはな
しをしてならぬ、お客さんに對しても、やはり此の筆法を用ゆる、
御新造さんがいたく氣にかけ、さんや、人さまの前に出るときは、
アネサンカプリをとりねばならぬし、タスキもはづさねばならぬ、

まして尻をはしよつて、スツヤモ、をあらはしては 女子の耻じや
 かまへて人に笑はれねやうにせよと、クドク注意するけれども、
 そのくせがなほらぬた、ある日御新造さんのところへお客がきて、
 御新造さんにお客の間に呼ばれたが、あまり急によはれた爲めに、
 いつものなりにてウカ／＼飛び込んだ、お客のあるのでハトツ氣が
 つきタスキをはづし、カンサシにひつか／＼りし手拭をむりにかひや
 りあはて、座つたものであるから、お客さまや、御新造さんの方
 からは股以上まで見らるゝのである、御新造さんはホ、と笑ひさ
 んや、なんといふあはてやうだと、笑はれ、見ればこれはしたり、
 あまりあたらしくなま腰まきもゆる、おとももまるだしである

アツトいふて逃げだして、いくら呼んでも客間には這入らなんだ、
 たかく尻はしよりをして居て、それを取らずに座つたから、かゝる
 失敗をしたのだ、

〇月 經

田舎の親類から、今年十四になるひとりの小娘を、下女がはりにつ
 かつてくれとてたのまれたか、年に似あはずよくはたらく、よい兒
 をあづかつたど、大よるこびで居たところが、どうしたわけか、一
 兩日來かほ色がわるい、どこかわるいところがないかときいても、
 何んともなしとこたへる、しかしかほ色はますますわるい、さて困

つた、どうしたものかと心配してゐると、その晩にコッソリと御新造のまへにきて、小「御新造さん、わたくしは死ぬかも知れぬ、ソリヤ又どうしてサときけば、かは色をサツと赤くして、小「ハイ、實にお耻かしくて、新「ナニはづかしいことがあるものか、何んでもよいから、こつそりとわたしにおきかせ、決してゐるいやうにしないで、小「ハイ、ありがとうございます、なをるか〜と、氣をつけておりますけれども、ハイ、ます〜つよく出ますので、新「フム、何が出るのサ、小「ハイ血でござります、あんなに血がでましては、とても助かるまいとおもいますんで、新「フム、してその血がどこから出ます、小「ハイ、あのおかしなところからでござ

いますと、かはをあおくしてゐる、新「ホ、ハ、ハ、ハ、此の子と
 したことは、おまへまだ月經といふもの知らんネ、小「ハイ、さ
 はりと申しますと、新「イヤ、それなら心配することはありません
 二三日あるとしつかりなほりますといたた、

○注意ふかき下女

ある大家にて、五六人の女共を仕つて居られけるが、八疊の一室を
 もつて、女中部屋にあて、おかるゝものから、甲のものを乙が使用
 したり、丙のものを丁が喰つてしまつたりして、随分とがやくし
 てゐるが、たいひとりお貞といふものばかりは、人のものを使用す

ることななければ、巳のものをも使用せしめぬのである、あるとき
 朋輩の女中が、國元へ手紙をやるので、お貞のまきかみをソット出
 してつかつて、もともと寸分たがはぬやうにして、元のところへおさ
 めておいたが、お貞が一目見ると、みんなにむかい、どなたかまき
 紙をおつかひなされましたネ、御つかひなすつてもかまいませんか
 ら、どうか一言おことはり下さいと云ふた、みんなでだれが手紙を
 かいたらう、乙「わかつた、お甲さんだ、甲「わたしよ、少し
 紙がたならなかつたから、ソット出してつかつたよ、それにしても、
 あれはよくあどしまつをしておくのに、どうしてお貞さんに分る
 だらう、どうもふしぎでならぬ、丁「わたしもどうも一本まいられ

たことがあるよ、だがどうしてもそのわけはわからぬよ、丙「わた
 し達のころろえのために、ひどつお貞さんに降参して、きかふでな
 いか、甲「それがえいワ、どうしてもかなはないから、丙「それで
 はきましましやうとて、それからお貞にあたまをさげて、そのわけを
 たづねたところが、真「別に六かきさことはありませんよ、先づま
 き紙でおはなしすれば、わたしのつかつたときは、キットそのまじり
 口に、ちよいと墨をもつて印をつけておきます、若しその印が見え
 ませんときは、誰か使用したのに相違ないのでござりますと云ふた
 一同「オヤ、そんな策略があつたのかといふた、

○色 白

あるところに、かほはさまでよくはないが、色はあくまで白く肉はあくまでもふとりて、直實に愛くるしき下女があつた、ある人がこれにははなれて、おまいのまつしろくて、おとつてゐるところを見ると、どうも氣もちがわるくなつてこまるといへば、下女はニッコリとして、氣もちのよくなるやうにしたらよからうといふた、

○煙草

うはへをかざりたがる或るところの内儀さんが、新造の下女にむかひ、新造「これ六や、下の簞筒から、たばこを持つてきてくれれといへば、ハイと起つて往つたが、暫らくしてあがつてきて、下の簞筒には見あませんと云ふた、内「これ六、モウ忘れましたか、き

のふもおしへた通り、下の簞筒と云ふたなら、下町のたばこやへ馳せて往つて、たばこを買つて來なくてはなりませんよと云ひきかせた、ある日來客のあつたとき、下の簞筒から、たばこをもつて來よといへば、ハイといふて立つて往つたが、しばらくすると登りてきて、下「御新造さん、下の簞筒は、モウ移轉て居りませんといふた

○あたゝかじや

八十からになる御隠居さまが、ある夜お大といふ肥大な下女をそば近くよばれ、隠「これ大や、お前にひとつのたのみがある、給金が二圓でも三圓でも増してやるが、きいてくれまいかと言はれた、大「わたくしの身にかないましたことなれば、隠「かなふともくお

まいのやうな人でなくては。とても無駄なんだ』大『へい、そうしてどんな御川でござります』隠『イヤ、外でもない、晩がら己と一所に寝てくれ』大『そればかりは、御免下さいませ』と少しムツますれば、隠居はカラ／＼とうち笑ひ 隠『れ大、おまへわるく取つてはこまるぞ、私は此の年になつて、何もわるい丁簡はないが、たゞ年を取るとな、さむくてさむくてならぬのじや、だからおまへを温石がはりに、そばに寝てもらへばよいのじやろ』と言はれた、

○慈 姑

少しばかり耳の遠い下女が、奥さまからおひまをいたゞき、二三人の朋輩と、花見に向島に出かけた、梅若の近所まで往つて、そゝ

／＼かへるとき、かの耳が遠い下女が、ある茶店に近より、此の粟の團子はいくらだへとさく、茶店の女中は、女『イエ、これは粟ではございませぬ、慈姑でござりますと言ふて一本だした、するどこれをもつふたつ喰つて見て、下『是れは慈姑じやないか 女『へい、くわぬでござりますとこたした、

○畫 解

オイ、芳ちゃん、此のまへおめへに話した「レコ」のところから、此様手紙をよこしたよ、芳『フム、見せろ／＼、イヤフ、これはこれはだと云ひながら、篤と前後を見、芳『安さん、心が解けたか、安『イヤ、面目ねへがわからねへ、芳『なか／＼利口な奴じやネ、安

どして、
 芳「だつてうめへやネ、安「フム、さうか、おしね
 てくんねへ、
 芳「此の職人の染ものをしているとあるところがあつたらう
 安「それや「コウヤ」だネ、
 芳「コウヤ」といふから分からねへ、ほ
 んどうは「コンヤ」と言ふのだ、
 安「フム、それでは「コンヤ」と解く
 だネ、
 芳「さうさ、「コンヤ」は今晚と云ふころだ、それから此の
 一と云ふ文字をひとつかいたのはねらいよ、
 安「へい、なんといふ
 心なんだ、
 芳「一といふ字だらうだから一時よ、
 コンヤ、イチジと
 云ふころとなるのだ、
 安「フム、かんがへやがつたネー、
 芳「な
 んだ、
 頬かむりしてゐる人間が、
 塀を乗り越こゑるところか、
 それか
 ら、
 鯉が一尾かいてあるネ、
 ムウ、
 分つた、
 安さん、
 モウあと

はおあづかりだ、
 胸くそがわるいや、
 安「芳ちゃん、
 後生だ、
 たの
 むよ、
 ドツサリおどるかられしへてくんねへナ、
 芳「ほんとにお安
 くねへせ、
 ぬいか、
 此の塀をこゑるところは、
 しのびてと云ふこ
 ころよ、
 それから鯉は来いと云ふころだから、
 コンヤ、
 一時にし
 のんで、
 来いと云ふことになるのだ、
 安「ありがてへ、
 分つた、
 ところで此の返事をやりてへが、
 何と云つてやらう、
 安「柱く氣たら
 う、
 安「往きてへや、
 大「そんなら往くと云ふやうに知らしてやる
 んだ、
 安「さてよ、
 若しわからぬへとこまるだらう、
 芳「ハ、ハ、
 大丈夫だよ、
 此の位なことをかく女だ、
 どうしてわからぬへ
 ことがあるものか、
 安「そこで、
 何をかいてやつたもんだらうと、

深くかんがへて居る、芳「斯かいてやるか、安」どうサ、芳「よし
か、斯いふ風に、雪の積つてるところだ、安」ウン、分つた、芳「
それから、此の下へ、ひとつの升をかくんだ、さうすれば、ユキマ
スとなるだらう、安」うまいナ、芳「ちゃんはんとうまいよ、斯
して投げ込んでおいて、今夜の一時を待つばかりだ、芳」そこで
禮はと催促したらどうする、安「どうもしねへ、まだこれから十何
時間もあるに、べんくを待つても居られねへ、そこへ呑むに往
かふ、ひるめし兼帯として、芳」よし、往くとしやうと、ふたりづ
れで飲みに往つて、たらふく飲んで喰つて、日のくれると家へも
どつて一睡りし、起きて時計を見れば、是れはおどろいた、モウ三

時すぎだ、ツアしまつたど後悔したところで仕方がない、又一寝入
りと床にもぐり込み、郵便くといふに目をさまして、ねきて郵書
を取ればやつどころからだ、手をわなつかせながら、開いて見れ
ばやはり書だ、ナンダ、白へ鳥をかいで、鳥の背中へ点がふたつか
それから男がひとりぼんやりとたつてゐるナ、フム、なんだらう
あとはなんだ、女が男にお辞儀して居るナ、一つ芳「ちゃんにたのま
ふと、それから芳三郎を訪ふて判断してもらふたら、薄情男さやう
なら、さやうならと云ふころだといふことであつた、芳「ちゃん
これを見て、下女にはおしい女だと評して居た

○あるい病

内儀「お半や、ちよいと来てくれ、半「何か御用でござりますか、
内「あ、少しはなしたいことがある、ネー半や、お前は實によく
れはたらきだ、れ前のやうにがげひなたなくはたらく人はほんとに
どうも少ないよ、それに器量はよし、禮儀作法は知ってるし、學文
もあるし、何ひとつ不足といふものはない、わたしはお前をば、い
つまでもわきへ置いて、世話をして見たいのです、ハイ、おまへの
やうによく出来た女は、なか／＼多くありませんよ、それに何故お
まへはあんなさもしい心をもつてゐるのです、ほんとうにわるい病
です、若し此のやまいを去りませんとネ、どんなことになるか知れ
ませんよ、わたしはおまへををきたいと思つてますが、お店の方か

らやかましく云ふてきましたから、マア／＼おひまをやりませう、此
のち共に、あしき心を出してはなりませんよと、嚙んでふくめる
やうに、異見してやつた、それから半月ばかりすきてある日のこと
お半めニコ／＼として這入つてきた 半「御新造さま、わたくしも
先達而の御異見で、しつかりと心を入れかへました、これはわづか
で御座りますが、決してちよろまかした品ではござりませんから、
お納め下さいまし、此の後も又不意と手に入りましたら」と云ふて
氣がつき、いづれまた参じますとて急にかへつて往つた、

○おさつ

ある商家に雇ひ入れた下女は、よほどの下卑三であつていつでも

まみ喰ひ、ぬすみ喰ひをしてゐる。ある日小僧の長松がちよつと下女のおどころを見ると、大分あくれてゐる、ハテナと首をかしげた長松は、見えがくれに下女お安のあとへついて往つた、するとズイと便所に這入つた、長松はハ、アと合点し、ソロリと忍び行くと、どうも何か喰つて居るやうだハ、テなんとして見とめてやろうといろいろさままにしたけれども見るところがない、そこでキツと思案をさだめ、だしねけにグイと其の戸をあけた、するとお安めもろ手で大きなさつま芋をにぎり、ムシヤリくとやつてゐるところであつた、これはと戸をグイツとおして、ハ、ハ、ハ、ハ、

○兵士の人形

ある商家のおさん、お嬢さんをおんぶして、人形かひにと出かけたが、あれのこれのを見て居るうちに、何に感じたか、シクシクと泣いてゐる、人形やのれかみさんは不思議におもひ、こなさんは子供にでも、さきだ、れたのでありませんかときけば、イエ、あの兵隊さんの人形を見れば、まるでなくなつた内のに背ておりますからそれだなみだをながしたのでござりますと云ふた、

○手がながい

吉さん、れまへとこの隣りの太郎兵衛さんネ、随分とかけによらない氣の長い人だネ、吉「ア、ほんとうにさうだ、併し人は見かけによらぬものを見えてネ、そら定さんも知つてゐ、れいらの一軒

さきの唐物屋の下女ネ、定「ウム、あの評判の肌品だらう、吉
「さうだ、あれだ、あんなに小粒で居て、手が大層に長いと云つ
てるよと云ふた、

○素 顔

れ春「お夏さん、昨日はじめて雁次郎を見ましたがネ、あれなら紙
治がどんなによいでしよう、夏「へい、それはよかつたネ、男ぶり
はよいでしやう、春「エ、寫真どひとつですワ、ただ寫真よりよ
いのは、色艶のよいところですよ、夏「どんな風体をして居ました
の、春「風体ですか、それは見るひまがなくなつてよ、顔を見るひま
さへおしいくらいですもの、どうしてなりなど見てゐられるもんで

すかど云ふた、

○ある智慧の下女

あるところに、我が子の事とさへいへば、何事にも餘念のなき人が
あつた、あるとき餘所よりかへりてくると、座敷のかへ一面に、い
ろはにはへとや、アイウエオなぞを、すみくろくどかきつけてお
いてあつた、是れは與太郎と云ふ小供の、機嫌をなほすために、下
女共が一所になり、かきちらしたのであつた、主人はこれを見ると
いたく立腹し、下女共を呼んで、これ等は何に留守にさへすれば、い
つもく此の通りだ、これ見よ、かべはみなすみだらけになつたで
はないか、何やつのいたづらぢや、まつすぐに申せ、申さんとゆるさん

ふと、このほかなるはら立ちだ、すると下女のみどりはすゝみ出で、イエ、それは誰のいたづらでもございませぬ、興太郎さまが、手ならひをするんだとおつしやりました、あそばしたのでござりますといへば、忽ちきげんをなほし、ナニ、興太郎がかいたと、ハテサテきような手になり居つたよと云ふ、

○癖

田舎から這いだしの下女、手鼻をかむくせありしかば、深癖の主人いたく氣にかけ、始終氣をつけて小事を云ふて居りしが、ある朝、手桶をさげて行きながら、鼻に手をあてチンをやつた、旦那これを見て、あゝ、きたねへと自分の手を、ゴリ／＼とあらつて居た、

○全

あるところで、質朴でつかへ心がよいとて、這出しの田舎ものを下女においた、あるひのこと、かの下女が日なたに出で、鼠いろにかはつたむさくるしきものをひろげ、何かひろいながら口のなかに入れて居る、御新造はふしぎにおもひ、ソツト忍び足してうしろに立つて見れば、これは又おどろいた、ねずみいろにかはつた古腰巻から、米粒よりも大きくなつた蟲を、取りては口に入れ、プツリとかみつふしては、ツとそこから吹き、プツリとかみつふしては、ツとそこから吐きだしてるところだあつた、ア、胸がわるい、

○意中の人

室町のある呉服屋の嬢さんが、どうもふしぎな病ひに取りつかれ、朝から晩まで一室のうちに閉ぢこもり、何かよくふさいでゐるひと粒の嬢さんに、もしものことがあつてはといふので、名醫といふ名醫に診てもらふたけれども、何處と云ふてあしきどころがないといふのじや、それからお氣に入りのひようきんもの、下女のお虎に命じて、その真相をさぐらんとしたけれども、どうしてく口を開かぬ、うこでお虎は獻策して、これは内にはかりたれこめて居るから氣も自然にふさいでくるのであるからして、さいはい梅の花も見ごろのことゆゑ、蒲田あたりをふらくして、氣をひきたてるが一番たといふので、小僧の左吉をつれて、東京電車から京濱電車が

へ乗りうつり、先づ蒲田の梅園へと飛び込み、お虎の馬鹿ばなしに氣をひき立てられ、あちらこちらと見てあるき、くたびれあしを休めるとて、園内の亭に入れば、若き男の三四人づれなるが、先づ坐を占めて居た、むすめは見るともなしに、その四人づれを見れば、こはそもいかに、自分のあけてもくれても、忘れかねて居た意中の人が、そのうちに加はつて居た、ハツト胸をどいろかして、顔の色まで赤くした、お虎はハ、アと悟つてしまひ、どうがなして、互いに口でもかしてやりたいと、いろくさまぐに氣をくばつて居たが、忽ち思ひうかんだことがあると見ゆ、袂から敷島を取り出し左吉どん、れ火鉢に火があるかへときけば、左吉は手をやつて見て

おあいにくさまと笑つてゐる、それでは火を取つてこやうと立ちにかゝれば、かの人は口をはさみ、いや、こゝにありませんとて手づから火箸に火をはさんで、此方の火入にうつしてくれた、ね虎はさすが、これはくありがたふございました、どうもさきほどから見うけますに、さつかでね見かけ申したやうでございませうがと云へば彼方もまた、さうです、何處でござんしたらふ、ハテ、あゝあゝ、ねもひ隠しました、歌舞伎座の紙治を見に往つた時でしたと云へば、ね虎もさうでございました、どうも年を取りますと、忘れつぱくなりましてと笑へば、彼方もハハハ、と快よく笑ひ、これから何方へお出でになります、虎「ハイ、小村井の方から、大師さまへ参

らふとねもひますので、男「それは一段とおもしろく存じます、我々も實はその方面に参らふかと、相談して居るところでございませう虎「それはねがつたりかなつたりでございませう、ネーお嬢さま、よろしいんでございませう、娘「おまへのよいやうにれしどかほをあかくする、男連は、サア、御案内しましょうと、ドヤ、と出て行く、お虎はニコニコしながら、茶代の外に、多分なる手當を女中にわたした、女中はあしき相なかほつきして、女「何ひとつさしあげませんのにと云へば、お虎は、ホ、ホ、と笑ひながら、虎「それはネ、煙草盆に火がなかつたお禮だよと云ふた、

○ 鏡 代

徳さん、おまへに先ころもはなしたそれひかふの美形ネ、徳「ウム
あの小間物屋の女公か、傳「さうだ、あの女ならネ。昨夕こんなら
れじいものをおくつてくれたよ、女「なんだこれは、傳「おやすく
なかるふ、中を見てくんな、徳「よし、フム、御かがみ代金壹
圓かど、ちと首をひねつて見、ハ、ハ、ハ、と、うち笑ひ、傳さん、
おまへ此のおくりものは何故うれしいんだ、傳「たつてかんがへて
見ねへ、縁もゆかりもないおいらへさ、壹圓でもをくつてくれると
は、うれしい心ではないか、徳「ハ、ハ、ハ、めでたいナ此の人は
かがみ代といふはさういふ心が知つてるか、傳「それがわからねへ
た、ア、それでおめへに見せたのよ、徳「さうかそんなら言つて

きかしようか、あの女はネ、此の金で鏡を一つ買つて、篤とかがみ
で自分のつらを見て、それから戀文なり、結婚なり申しこめといふ
心なんだよ、傳「エツ、それではおれの面がまづいから、かがみと
相談してのちに、つけふみなり何なりしろといふのか、うぬ、おぼ
えられたれと言ひながら、いきなり徳さんのあたまをポツカリとやつ
た、徳さんはきもをつふし、徳「傳さん、傳さん、ひどいじやねへ
か、傳「イヤ、これは御免だ、すまねへ、徳「おめへのく
やしいのも無理はない、おこるのも尤もじや、そこで之れに對して
の返辞はさうする、傳「くやしうつてならぬへ、それは己は醜男だ
醜男だからつて、美形をかゝるにされぬといふことはないからネ、

徳「さうす、それでさうする、何と返辞をする、傳「おいらには返辞のしようがねへ、徳「よし、おいら工夫してやる、あやつ下女面をして居やがつて、そこでど、何をおくつてやらうナと、しばらくかんがへて居たが、徳「よし、えいことがある、おいら一寸往つて買つてくるとて、かの壹圓を持って出て往つたが、しばらくするどかへつてきて、六七枚の繪はがきを買ひ來り、これを封入してかの小間物屋の下女のところへよこした、下女め何んだらうと、ひらいて見ると、繪はがきだ、してその畫は、小野の小町の、菰をさして竹杖にすがり、ヨボ／＼あるいて居るところである、それから又屈強なる馬が、はなをたらした、馬鹿らしき男を載せて居るところ

だ、又一枚は、色のくろいミツチヤ男が、幾萬圓といふ金をつんでるところへ、業平のやうなよい男が、ボロボロした風体をして、金でも借りにきたようなどころである、その外のものもみなそんなものばかりであつたが、最後の一枚は、ひよつとこ面の男が、「ベツカコー」をして居るところじや、女中はねもはずこゑをたて、オヤ

○お茶の給仕

あるところの娘婿が、今日嫁と一所に實家にきたといふので、下女共のさばぎは一方ではない、するとお松と云ふ女中は、ツンとすまして、松「みなさんの大さはぎするやうな方でなくてよ、お駒さん

のどころへむこにきた、喜藏其のまよと云へば、下女共はたがひ
にかほを見むはせ、それではお嬢さんが御かわい相だといふた

○美人の相場

ちよつと濫皮のむけた下女が、店の番頭をとらへ、下「番頭さん、
美人といふのはず、どのくらいなところから云ふんだらうと云へば
番頭はあたまをかき、商賈ちがいたからわからぬと答へた、

○多言

此のころとなり邸では、よく口上を云ふ下女をかへたといふこと
だから、ひとつためしに往つて見やうとやないかといへば、他のひ
どりは、それはおもしろからう、行くべしとて、二三人つれだ

ち、ぞろ／＼と出かけた、さいはい主人も内に居て、これは／＼、
ようこそおいで下された、サ、奥へお通り下さいといはれ、奥座
敷に通つて、いろ／＼さま／＼のはなしをして居るところへ、かの
下女つかいさきよりかへりきて、主人のまへに手をつかい、さきさ
まにて、今日はようおつかひを下されました、仰せ下されます通り
だん／＼冷氣におもひきます、いよく御別條もござりませす、
お目出度存じます、今晚は新蕎麥とあつて、わたくしまで召しよば
れ、かたじけなう存じます、それへ参つて、お禮を申しましよう
と、定めて仰しやるのでございませしようが、今日はお留守でございま
したといふた、さいてゐた連中は、これは／＼と頭をなでた、

○香の物

令度雇ひ入れた下女は、氣轉のきいた下女で、ねれが年よりだともうて、飯もやはらかに焚くし、何にも彼にも如才がない、あの分なら、さつと料理もするであらう、主「これお冬や、お冬よこばアイといふてタスキをはづしながら、障子の外に手をつく、主「おまへ料理の心得があるか、冬「アイ、少しは心得てております、主「それなら香物で茶漬か喰ひたい、何か香物を見つくりつて、甘く喰はしてくれまへか、冬「かしこまりましたと勝手に往つたが、しばらくするとやがで膳をもつてきた、さてもくもくも、昇事な手際だわいと、飯に茶をかけて、ザク／＼とやりながら、奈良漬けをつま

むと、一枚はどつ／＼とある、これはど外のものをつまむと、又つ／＼とある、／＼とけしからぬ、これほどの手際で、切れはなれのわるきはどつ／＼あわけだらうと、主「これ／＼、お冬や、ちよつと／＼、冬「なんぞ御用でござりますか、主「イヤ、外のことでもないが、れまへは是れまで何處の料理やに奉公してゐたのた、冬「イ、エ、料理やではございませぬ、主「そんなら何屋に居たのだ、冬「ヘエ、艾屋に居りましたりいふた、

○砂糖

お竹「番頭さん、砂糖といふものは何處から出まじやう、番「ウムあれか、あれは唐の砂よ、番「ヘエ、／＼、して甘味はなんぞつける

のでしやう、霽はらそれや、やつぱり砂糖さとうでつけるのよといふた、

○あまらぬ

連日れんじつのながあめに、物ものもらひの店みせさまに立つもの、うるさきほどな
り、ある家いへに氣轉きまのきける下女げにょあり、自みづから門口かどぐちにいで、御新造ごしんぞう
ま、どウかおあまりをやつて下くださいますといへば、下女げにょすかさず、
あまりませんよと答こたへた、

○針 醫

ある家いへの下女げにょ、癩しかがおきたからとて、針醫はりいをよびて針はりを立て、くれ
よといへば、かしてまりましたとて、先づ腹はらからさきにみはじめ、
だんぐと下したの方ほうへうつりて、ツイに途方とほうもなきところまでぶらり

はじめた、下女げにょびつくりして、何をなにされますといへば、イヤ、針はりを
たてやうとおもふて、もむところじやといふた、

○下女の策略

ある大家たいいのむと取り嬢じょうさんは、随分ずいぶんと人はしをかけて、是れまで聲こゑ
をらみをされたげれども、どうもこれはと云ふほどの智君ちきみに見みあた
らぬ、ろこでお嬢じょうさんは、ヒステリーとかをおこされて、六むかしや
のお嬢じょうさんと名なをかへられた、ある時ときお氣いきに入いりのおすみお御嬢おじょうさ
んのお部屋へやに行いき、すみ「お嬢じょうさま、おもしろきことを工風くふういたしま
した、すみの申まうし上げる通とほりになさいますれば、きつとよいお聲こゑさ
まか見みつからふとれもひます、嬢じょう「すみは又またはこを言いやるの、ど

うして其様にたやすく、よい方の見つけらるべきぞや。す「イエ、ほんどうのことぞござります、襦取りと云ふ妙計を工風いたしましたんで、嬢」それでは、言つて見やいの、す「イエ、こゝで申しあげては、何にもなりません、マアくすみの申しあぐるやらになさいますとて、いよくその通りにすることになりました、それから五六日たつと、清水の舞臺から、うつくしい別品が飛ぶのうはさが、京中一ぱいにきこえた、物見だかきはミヤコの常だ、清水の舞臺の下は、まるで人間をもつて垂めたやうじや、そうして居るところへ、こしもとあまたをつれた、うつくしきむすめが参詣にきた見物はあれじやく、あれこ舞臺からどぶのじやと、どやくさ

はいで居る中を、御免下さい御免なさいとて、たしわけく本堂へまゐり、暫らく祈念をこらしてゐたが、被衣きながら舞臺へ出で、高欄に片足かけ、方々見まはし見まはし、むすめ「ア、今日はどうやら飛びこゝろがわるい、止しにしやうと言ひながら、供人うちつれ、しづくとかへつてしまつた、又翌日もその通りにしてむなしくかへりしが、道々すみをそば近くよばれ、むすめ「すみや、殿方をたんとあつめて見ても、さて美しい男はないものじやのと言はれた、

○居候

ある家の下女、ひどく同情のこゝろに富み、かゝり人の膳にむかひ

は其のかほかたちに迷ひ、間がな隙がない言ひよるけれども、清之介
はいつもの、やんはりどこれを受けて、決しているより返辞をする
ことはない、お花はどつれいつ、此のことにばかり心をくさらずして
居たが、ある人に氣をつけられ、お成道の黒焼やにはせゆき、大ま
い三圓といふ大金を出だして、おもりのくろやきを買ひ求め、男の
方へは靴をおくれとあるゆる、ある夜人知れず忍びよりて、たしか
に清之介のきもの、たもとに入れて、これで安堵したとよろこんで
ゐたところが、清之介は少しも自分を愛してくれぬのみか、何んだ
かこれを厭忌してゐるやうに見ゆる、ところが多吉といふ同じ番頭
が、時々いやな目つきをしたり、又人のゐないときは、そつと手を

握つたりすることがある、最初はいやなやつと思ふてゐたのに、ど
ういふわけか戀ひしくなつてきた、のみならず清之介のつらは、見
るもなんだかいやになつてきた、うれから半年ばかりの後に、多吉
お花は、新處帯をもちて、夫婦なかとなつてしまつた、ある時多吉
に袂からかのゐもりのつゝみを出だし、多「お花や、世の中には實
に妙なこともあるものなの、いつか何ものか、私の袂にこんなお
かしなものを入れてくれた、花「へッ、此のつゝみをたまへのため
どへ、オヤ〜〜、

○今常磐

去る大家の後家さま、ぎりやう世にすぐれたるゆる、人々こゝろを

かけざるはなけれども、貞女のみほさを立つるは此所なりと、常々
たしなみ厚く、家の大事をおもふて、おもてをつとむるゆる、髪は
むかしにかはらず、うつくしく取りあぐれども、心の中は尼にな
して、身持はなはだ堅くるしくありしが、まゝならぬは浮世のなら
ひ、かけがへもなき譜代の番頭、元より實体なるものゆる。旦那存
生の時より、家内のしつかい人なるが、かの後家さまに心まよひ、
あけ暮おもひわづらひ、今はこらへかね、人なき折を見て、おもひ
のたけをうちあかし、若し此の儀をおかなえ下されずば、おかほ見
あはせますも恥かしければおいとまねがひ奉つると申せば、後家「身
をけがしては旦那にすまず、番頭なくては家はたゞず、王手飛車と

かけられては、まことに返答にこまるどて、どつていつ思案ののち
旦那存生の折りからの下女をよび、斯いふ譯だが、どうしたらよか
らふと、その所存をたづねれば、下女はニツコリとうちわらひ、
下女「兎角お家の立つ思案が肝要でございます。貞女をやぶつて貞
女をたつる、王手飛車の返答、こりやまけて一番さしかへられるが
よいといふた、

○雷

若旦那「オ、お富士、此の間のかみなりでナ、おとなりのお
んが、脚をとられたと見えて、即死したとよ、だがあの時におまへ
にだしぬけ飛びつかれて、おいらほんどにびつくりしたつたよ、

下女おふじ「わたしはあのかみなりさまのわかげで、若旦那にお入
その下を取られましたけれど、いのちにはさまりませんでしたよと
ニッコリとわらふた、

○氣のきゝたる下女

あるところで一匹の猿を飼ひ、いろ／＼なるいたづらをさせて、こ
れを見てたのしみとしけるが、ある時縁側にかみそりをおいて、髯
をそらんとして居けるに、いつの間にか彼の猿めが忍びきて、その
剃刀をぬすみ取り、はるかなる木の上に登つてしまつた、人をあな
やどさはぎたつれど、たかき木の上なれば詮仕様なく、あれよく
どさはぎまはるのみであつた、ところおしづといふ利根なる下女を

かけきたり、此の体たらくを見て、きつと思案するところがあつたや
うであつたが、かたへから木の枝を取りあげ、木の上の猿を見なが
ら、左の手にてその枝をしかと握り、右の手にて無理に之れをひき
ぬき、かくすること再三におよぶと、猿めたちまちそのまねをやり
かみそりを片手にてシカとにぎり、片手にて力にまかせてひぬきい
た、何んぞたまらん猿めの手のひらは、かみそりのため、深くきら
れ、くれないなる血がサツトながれ出た、猿めびつくり仰天し、力
をこめて地上になげつけた、なんと早速の智慧のたくましき下婢に
あらずやだ、

○地 震

年若きかみさんにむかひ、下女「御新造さま、昨夜の地震は大層につよふございましたといへば、内「ほんとに春は人がわるいよといふた、

○人が違ふ

呉服町の大通りに、唐物店がある、その唐物店に、近所大評判の美人がある、其の美人はその家のむすめでなくて、下婢であるからめづらしい、ところがそのとなりの呉服屋の若旦那は、此の評判のおつやさんに首つたけで、そして唐物屋のむすめのおきよさんは、此の若旦那の芳雄さんにはの字であるのだ、だからあけてもくれない、おつやに口説たて、中を取りもつてくれといふのじや、おつやに

は言ひなづけの男があつて、それが兵隊から歸つてくるのを待つてゐるのだ、だによりて隣りの若旦那が、いかにちやほやしても、之れになびくやうな女ではないのじや、されどお嬢さんの朝晩の口説に對しては、どうも困却するより外はない、ある晩おつやはお嬢さんのおきよさんにむかひ、喃喃と野合の不都合を説きたてたけれども、お嬢さんはどうしてもきかぬのだ、此の戀がかなはずば、死ぬるとまでに決心してゐる、そこでおつやはきつと取りもつから、よくせずに待つて居れと云ふのじや、それから若旦那芳雄さんを通はせるには、となりの二階から屋根傳ひに、お嬢さんの御居室へといふことまできめて、そこでかねての返辭をかねて、今夜十二時

を相圖に、屋根づたへにきてくれ、二階の戸をわづかあけておくか
ら、戸をあけて這入つてくれ、そして這入つたならば、手をどつて
案内するからといふ文言であつた、となりの若旦那は大よろこびで、
其の夜をおそしと忍び込んで、かねての望みはかなへたが、それか
ら二度となり三度となり、五度十度となつてから、若旦那はおつや
でないといふことを知つて、大おこりにおこつて、ある日れつやを
途に要して、人が違つてゐたと不平を言ひますと、おつやは平氣で、
かへたまだから人の違ふはあたりまへだと申しました。

○質屋の番頭

お六さん、昨日からのさばぎを聞いて、六「聞かないわ、どんな騒
ぎ、エ、お七さん、七「おまへさんも知つてまじやう、此の横町の
質屋の番頭さんを、ホラ、ちよつと男ぶりのよい、貞さんといふ人
を、六「ハア、知つてますとも、お世辭のうまい人でしやう、七「さ
う、あの人が、あの人がネ、大變なことを仕出かしたつて」
六「ハエー、どんなことでしやう、七「お六さんも知つてまじやう
あの質屋のおさんをしてゐたお幾さんを、六「ハア知つてますとも
よ、一所に縁日に往つたんですもの、七「あの人、可哀そうなこと
しました子、六「ハエー、どうしましたの、七「おいくさんはネ、
どうから貞さんとよいなかぞつたんですと、それがネ、因果と腹に

くが出ましてネ、如何にも斯にも性様がなつたんですサ、六「エー、七」そこで貞さんの故郷は名古屋なんだから、先づ生れ故郷にもどつて、あたりの身のふりかたをきめやうてんよ、なんでも先月末に、ふたり手に手をとつてかけおちと出かけたんですサ、六「オヤ、大變古風なことをやりましたネ、七」それから静岡に滞在して、あたりの身のふりかたをつけやうとして、貞さんの叔父さんといふのに相談すると、叔父さんのいふには、ひとりの女のために、七年から年期を入れた、お店をかけたしするとは何といふ馬鹿をするのだ、お店からは私のところまで、チャンと知らして下すつた、兄貴のところへも文通があつたと見えて、今朝私のところ

へ兄貴から、きつどかづねて行くであらふが、世話をしてくれてはならぬと云ふてよこして居る、おまへあたり名古屋へ往つたからとて、マア今のところは、世話のしてはあまるまいと云ふのですつて、サアふたりの困難は、言ふも野暮といふだけになりましたネ、ほんとににちもちもさつちも出来ぬとは、こんな時のことをいふのであらふと云ふまでになりましたとサ、さうしてゐる内に、宿屋の支拂はかさじ、金子がつきるといふ破目になつて、わづかな旅費を力に、濱松の叔母さんところへ往かふと、汽車賃もなくなつたものだから鐵道線路に従ふて、トボ／＼あるき出して、富士川の線路をわたるころは、たそがれ時となつたから、きはり道して橋をわたつた方が

安全だど、お幾さんが云つたさうですがネ、真さんがなせか無理に線路をわたつて、中央ごろになると、不意にむかふから上り汽車がやつてきたんですつて、真さんは男ではあるし、身もかろいから、平氣でよけたさうですけれども、おいくさんは可哀相に、身おもな上に、女のことですから、あまりびつくりしたものと見え、足をふみはづしてからに、まづさかさまに、ドブンとおつこつてしまつたんですつて、六「へエー、可哀相にマア、七「それに真さんはネ、これを助けやうともせず、又自分も共に死なふともせず、お幾さんのどん／＼ながれて行くを、平氣で見て居たんですつて、あきれられるではありませんか、六「それはさうでしやうつて、平氣で居ました

らふサ、七「へエー、なせですな六さん、六「だつて真さんは、質屋の番頭さんでしやう、ながれることを何んと思ふんですかといふた、

○焚きつける

熊さんく、むかふの喧嘩は火の手がますますさかになつてきたオ、熊「あたりめへサ、八「なせく、熊「だつてれさんが仲裁に這いつて居るからサ、八「へエー、れさんの仲裁じやあいけねへのか、熊「さうじやあねへか、そばから焚きつけてゐるから、

○金になる

十四五と見ゆる、何處の小間仕へらしき女の兒が、ちよこ／＼やつ

てくると、あとから商家の番頭らしき、十八九の若ものがおつかけてきて、若やへちやん、何處へ往つてきました、小「オヤ、お店の源さんですか、御新造さんの御用で尾張町まで参りました、若」それあ御苦勞さまでした、時にちやへちやん、八重ちゃんは何處へおよめに往くの、小「およめになんが往きませんよ、若」さう、それではお聲さんを取るのしやう、小「イエ、お聲さんもとりませんわ、若」はツてオ、それでは尼さんにでもなりますの、小「いやなこつた、誰が尼などに、若」はて分らん、それでは一体何になります、小家の爺父さんはネ、今に金になるつて言ひましたわ、

○中間兒

八さん、ひかふの女公ネ、八「ナニ、女公ツ、女公てやなんだい、熊」ハ、ハ、ハ、符帖だよ、下女公と云ふころサ、八「下女公とわ、おそれ入つた子、ウム、あの色白のことだらう、熊」さうくその色白サ、一体われば何者だらう、八「何者だらうが、大きにお世話だと言つてるせ、熊」だかチー八さん、少しもめ筋があるんサ八「フン、耳よりなはなしだ、一体どうするんだ、熊」實はネ、虎公と賭をやつたんサ、わいらは日本種だと云ふたら、虎め西洋種だと云ふんサ、そこでれめへにき、に來たんだが、おめへの鑑定はどうだらう、八「ハ、ハ、ハ、いくら賭だ、熊」ウム、二圓介か八「それならず、虎が一圓にれめへが一圓止しねへ、熊」なせく

八「だつて兩方共にはづれたからよ、熊」フム、ハ、ハ、どういふ譯
だらふ、八あれか、ぬれは中間兒も中間子、支那人と猶太人との
中間兒だからサと云ふた、

○闇夜の鐵砲

常どん、家のおなみさん位、利口で器量よしは稀れたネ、常「定ど
んのいふ通りだ、だから我射ておとさんと、随分ねらひうちをやつ
てるものがあるやうだせ、定」さうともサ、そのうちの熱心家は、
友さんのやうだ子、常「どころがおなみさんの利口だからネ、下女
こそしてゐるもの、どうして、お家の御新造さんと跳生だら
う、定」それでは誰の手に入るだらう、常「おいらの見るところで

はみんな、落第たらうと思ふネ、定「なせ、常」だつて昨夕友
さんも徳さんも貞どんも清どんも、みんな闇夜の鐵砲だと云つて
ゐたからサ、定「へー、闇夜の鐵砲とはどういふ譯だへ、常」的
が外れたといふ謎サ、

○莢豌豆

魯介さん、お米さんも氣の毒だ子、魯「さうよ、あのくらの器量
をもつて居ながら、何も下女奉公するにあたらんではないか、それ
にタスキがけの手桶さげときてゐるから、おいらも氣の毒で、
たまらぬわい、迂」さうだ、先頃も米さんの爺父に遣つたとき
なせ嫁にやらぬのだときいたら、まだくと云つて通りすぎたよ、

八「だつて兩方共にはづれたからよ、熊」ブム、ハ、ハ、どういふ譯
だらふ、八あれか、あれは中間兒も中間子、支那人と猶太人との
中間兒だからサと云ふた、

○闇夜の鐵砲

常「ん、家のおなみさん位、利口で器量よしは稀れたネ、常」定と
んのいふ通りだ、だから我射ておとさんと、随分ねらひうちをやつ
てるものがあるやうだせ、定「さうともサ、そのうちの熱心家は、
友さんのやうだ子、常」どころがおなみどんの利口だからネ、下女
こそしてゐるもの、どうして、お家の御新造さんと跳ねたら
う、定「それでは誰の手に入るだらう、常」おいらの見るところで

はみんな、落第たらうと思ふネ、定「なせ、常」だつて昨夕友
さんも徳さんも、貞さんも清さんも、みんな闇夜の鐵砲だと云つて
ゐたからサ、定「へー、闇夜の鐵砲とはどういふ譯だへ、常」的
が外れたといふ謎サ、

○莢豌豆

魯介さん、お米さんも氣の毒だ子、魯「さうよ、あのくらの器
をもつて居ながら、何も下女奉公するにあたらんではないか、それ
にタスキがけの手桶さげときてゐるから、おいらも氣の毒で、
たまらぬわい、迂一「さうだ、先頃おれ米さんの爺父に遭つたとき
なせ嫁にやらぬのだときいたら、まだ」と云つて通りすぎたよ、

魯「おらおよねさんなら、借金を質に入れても、きつともらふと思ふつてゐるくらいじや、」
正「おいらもさうじや、家も藏る地面もうつちやつてのお米さんを取りかへやうとおもふくらいじやと、はなしてゐるところへ、それはだめじやとひよつくり顔を出したものがあゝ、ふたりは、是れはいかなとうち見れば、才吉といふ朋輩じや、そこでなせだめじやときけば、オ「男のものを身とすれば、女の道具はサヤだらふ、二人」ハ、ハ、ハ、ハ、さうだ、それにちがいはねへ、オ「そこでだ、お米さんの爺父さんは、いつも、萊縁遠と云ふて、うりにあるいてゐるから、急にはなかく縁づくまいよと云ふた、」

○流れてしまつた

質屋の隠居老爺、下女のお千代に手をつけ、ツイに身おるにさせた爲め、家内のだたく絶へぬところから、ある心やすき産婆のところへたのみ、月々の手あては、みな隠居のところから送つてゐた、ところがある夜中に、御隠居さまに至急と、産婆のところから使がきた、かけて往つて見れば、産婆は氣の毒さうなかはして出できたり産「御隠居さま、まことにおしきことをいたしました、隠「なせです、産「イエ五ヶ月目で、ツイに流産てしまひましたと云へば、隠「イヤ、残念なことをしました、利上げをしておけばよかつた、

○二階から飛ぶ

内儀「さんや、マア何んといふ馬鹿なまねをします。何處の世界に女の身とらで、二階などから飛びおりの馬鹿があります。さん「イヤ、長松どんが、飛ぶは當坐の耻、飛ばざらば未代の耻と申しましたからといふた、

○流行

れとさん。おまへのやうにあたまから、爪さきまで流行を追ふておつくりしては、わづかばかりのお給金では、とても足りつてはありはすまい。さん「どうですとも、だから毎月おつかさんのところから、お小遣を取りよせますの、反「なせそんな馬鹿なまねをするの、さん「だつて私のかねは、當世むきでないから、流行にばかり

も、おくれたくないと思ふて、

○金でひかる

新「是れ花や、たまへはマア下女の身分で居ながら、金の指環を三ツも四ツもはめて、それに齒まで金で入齒などしては、世間の人に笑はれますよ、花「ハイ、それは素より覺悟のまへでございます。新「それではたまへは、人にわらはれるを覺悟で、そんなまねをおしかへとさけば、花「だつて御新造さん、金で光る世の中ではありませんかといふた、

○小供は正直

父「これ健一や、何んのまねをします、何處の世界に猫の口をなめ

る人がありますと叱れば、健「オヤ、おかしい父親さんだ、父親さんは昨夕、れきよ(下女)の口を、新様やつて嘗めて居たじやあないか
といふた、

○夢でよかつた

若旦那「是れきぬ、私にれまへのためには、随分と心を勞してゐるが、それになんた、今見てゐれば番頭の桃吉といちやついて、ほんとははたで見て居るも氣の毒なやうであつたが、そこでなきぬ、私は是れからおまへには手を出さないよ、指もさすまいよ、あいか、決して怨んでほくれまへよ、絹「わたくしがわるふございしました、何といちやついて居たわけでも何んでもありませんけれど、桃さんとは

なしをして居たのはわるふございしました、それから桃さんは、若旦那さまのなかを存じませんから、たまにはからかつたりすることもあります、それがれ目にとまりました、おはらだちになりますのはみなわたくしの足らぬためでございます、いやしき下女のわたくしが、御主人さまのおなさをうけておりながら、何とてあだしてゐるをのこしましやう、若しお心がとけませんならば、おこゝろのゐるまで、おうちなされませ、いさゝかもお怨み申しません、斯く下女の身で居りますうちは、逆も人のいたづらをよさせることの出來ませんのは、まことに残念でたまりませんと、よゝと泣き入るおのがこゝろで、おぼえずハツチリと目をさまし、ア、夢でよかつた

といふた、

○寫 眞

あるところに、見目かたち世にすぐれた下女がありました。その生來の尻軽にて、行くところのさきくにおいて、みな相當ないろおとこをこしらへ、いづれに對しても、みな夫婦約束をやつて居ります。ある夜十枚ちかきいろおとこの寫眞を取り出し、わたしもいつくまでも、下女奉公ばかりもしておられまい、いづれ氣に入つた亭主をもちて、家をかまへねばならぬが、さておとこの人にきめやうかしら、此の人も氣にひいたし、此の人も心になつてゐるし、此の人は親切だし、此の人はおとなしいし、此の人は男まへがよい

し、ハテ期様にある人のうちに、ひとりだつてよしたい人はない、ハテサテ困つた、どうしたらよからるか、ウム、一層今まで通り、せねもこれもわたしの人にしておかふやといふて、寫眞をひとまとめにし、ひしどきしめておとこのなかに入れた。

○善はいそげ

父「おれみちや、おれまへも知つて隣村の作市おんがな、おまへを嫁にくれつて言つてよこした、おまへのことをきいて見なくてはな、私の一存では返辭はされんじやて、そこでねじは何んと思ふぞ、みち「作市さんならよう知つて居ります、おちらでも、おんおんのよいやうになされませ、父「したがの、私のつれあいにもらふ

のではないとやて、おぬしのつれあいとや、だからわしの一存では
きめられぬや、併しおぬしに異存がなければ、やることにきめるが
みち』それやよござんすとも、して、いつかひにお出でなさる
父』さうさ、此のうちよの日がらを見ての上にしやう、みち』おど
つさん、今日は日がいとひあから、今日直におひまをいたらして
下されと云へば、父』イヤ、あまり急じや、二三日待つてくれ、今
日なぞと云ふては、どうして間に合ふものだ、だかおまへは、何の
ためにそんなに急ぐのだ、みち』たつておどつさん、善は急げつて
言ふではありませんかといふた、

○賣物にあらず

あるところに、大馬鹿ものゝ子息があつたが、その馬鹿むすこのと
ころに、おさめとらうつくしき下女があつて、何がさて、美女に
目のなき連中の多い世の中であるから、馬鹿むすこをよい相手にし
て賣つてくれるの、ゆづつてくれるの、たゞでくれるのといふもの
であるから、此のむすこ馬鹿であるからして、たぢまら本氣と考
へ、いつの間にかいたのか、すみくろくと、『賣物に非ず』の五字
を、彼の下女の脊中に張りつけておいた、

○光陰は矢の如し

内儀』おふみや、昨夕旦那はツイおかへりにならなかつたネ、ふへ
イ、おかへりになりません、昨日のあさ、濱までといふおはなしで

ございましたから、何か中途に御用でもね出来になつたのではあり
 ますまいか、内「だつて昨日の日暮に、吉野さんが淺草で遇つたと
 云はれたよ、お「へエー、それでは何か御用で、淺草の方へおまは
 りになりましたんでしやう、内「イヤ、わたしの思ふには、また公
 園の雛菊のところだらうとおもふよ、お「だつて音吉さんは、汽車
 のなかまでお送り申したと云つてましたよ、内「そこでネ、おまへ
 御苦勞だが、一寸公園まで一とはしりしておくれな、お「へいかし
 こまりましたと、女中部屋に引つ込んで出てこない、内「ねおみ
 や、何をして居るんだよ、お「今髪をなで居ります、内「なんだ
 ネ、大いそぎと云ふにサ、お「だつたお行きささを知れました上は

おいそぎになりませんが、よろしいではありませんか、内「イヤ、
 大いそぎに往つてくれ、間にあはんどこまるから、お「へエー、う
 れやせう云あわけでしやひ、内「だつてひかしから、公園(光陰)は
 矢の如しと云つてるから、若しおそいと間にあはんからサと云
 ふた、

○ 瘋癲病院

麴町區は上六番町に、運野芳郎と云ふ高等官がある、その家の書生
 に高賀順佐といふ助平野郎が居て、おさん兼小間仕ひの、れいろと
 云ふポツヂヤリものに手をつけ、ツイに木魚講の仲間入りをさせ、
 はらのもつてき所のないところから、れいろを其のまゝにして随徳

寺をきめたが、斯様書生の何處へ往つたからと云ふて、身のたつべきやうがないから、パンのためにもどまどしてゐると、本郷駒込辻菜町で運わるくおいろにとつつかまつた、おいろは泣くやら騒ぐやら、此のはらの始末をどうしてくれる、モウおまへさんを見つけたからは、決して離れることではないと、胸倉を取らんばかりの強行談判に、順佐も一ちいみにちいみあがり、順「マアわるいやうには決してせぬ、それでは斯しやう、此れからふたりで田端の病院にゆき、おまへの身ふたつになるまで、産科病院に入れることにしやう、さうすればおまへも安心だし、わたしも安堵して職を取ることが出来るぞ、無理においろを車に載せ、自分もこれに相乗りして、

故さらに二人輓となし、田端の脳病院へと引込んだ、それからふたりの車夫に女を守らせ、自身に受付へと出かけ、順「私は瘋癲のものを連れて、御療治をねがひに参りましたがといへば、受付の役員は心得がほに、應接の室へと案内してくれた、しばらくすると院長が出てきて、どんな風じやと病状をたづねる、順「實は私の親族でございまして、久しき以前から出京しまして、麹町區上六番町の某伯爵家のお小間仕に住み込み、今日まで何ごともなく勤めておりましたが、若殿さまと變な中にでもなりました、はらに曰くでも出てきましたものと見え、人のかはさへ見れば、此のはらをどうしてくれるとむきになりてかゝりますので、入費はすべて伯爵家から、支

出いすることになつて居まりますから、私わたくしが同道どうだういたしましたのでござ
います、なほるものでございしやうか、又またと言いひかけると、院いん
長ちやうはお待まちちなさひと云いひ、して年ねん齡れいは幾いく何なんぐらひですか、順じゆん「ハイ
廿に一じになりま、院いん「うんなのはいくつもあります、年としが若わかいから
長ながくて半はん年ねんもかゝつたなら、大たい抵てい全ぜん快くわいいたしましやう、併しかしさう云い
ふ病人びやうじんは何なに事ことも云いひなり次じ策さくにして、先まづ逆さからはんやうにする
のが、大たい切せきでございます、順じゆん「それから入院にんげん料りやうなどは、決けつしていど
ひませんから、成なるべく丁てい寧ねいにおねがひいたします、院いん「よろしい
少すこし入院にんげん料りやうはたかひが、病人びやうじんのことは御ご心しん配はいなさるな、順じゆん「それで
申まをしておきま、先せん生せいに對たいしましても、此このはらが、此このはらが

をやりましやうから、その邊へんは何なに分ぶんにもよろしくねがいます、院いん「イ
ヤ、委わ細さいこゝろにました、順じゆん「それから一寸電話いちじゆんでんわを拜はい借しやくいたしまし
て、三さん太た夫ふうに入院にんげん料りやうを持ぢ参さんいたさせます、院いん「して患者くわんげうは何なに處ところに居ま
ります、順じゆん「ハイ、御ご門もん内ないに、車しや夫ふうが二に人にんついてねります、唯ただ今いまつ
れてまゐりますと、それらおいろによくはらのことをたのめと言い
ひふくめ、同どう道だうして院いん長ちやうの前まへに出いでた、いり「さうも此このはらが此こ
のまゝでございますと、院いん「よろしい、御ご心しん配はいなさるな、いり「だ
つて心配しんぱいせずには居まられませんか、院いん「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、こゝ
にござつた上うへは、何なにも心しん配はいなさることはありませんよ、いり「ハイ
あんまり不ふ人にん情じやうでございますから、院いん「ウム、よく分わかりまし

た、少しのぼせてござるやうだ。いゝ『イエ、何んにも病氣などはございませぬ、たゞ此のはらが、院』イヤ、私が引さうけましたから、何も御心配になることはありません、順』では何分よろしくねがひあげます、それでは手、おまへもおとなしくして手と言ひきかせながら、玄關へと出で、車をいそがし立て、はしり去りながら、どうもいろきちがひには手がつけられぬと云ふた、

○臺所口

ふたり連の小役人が、廣小路の鳥又の二階で、甲『オ、君はなか／＼攀縁術がうまいと見ゆるよ、僕も君と共に、あの大學を出てから、共に官海に游泳してゐるが、君は月給五十圓といふのに、僕は

まだ二十五圓だ、學力だつて能力だつて、半分以上ちがつても居まいにナと云へば、乙は笑ひなかな、乙『第一君の失策は、妻君の正直なところにある、第二は下女に才物を任はぬところにある、第三は、搦手から攻め入る術を知らぬからである、甲『フム、第一は兎に角、第二はどう云ふわけだい、乙『おくさんの内意をうけて四方に使いして主命をばづかしめざるは、實に下婢の腕次第だよ、我が下婢の權勢といふものは、殆んど妻を凌ぐくらいだ、甲『道理で君のうちへ往くと下女が大なつらをして居ると思ふた、乙『そこで彼等小人は其の境遇に甘んじて、必死と奔走してくれる、我が下婢お才の如きは、將軍も象ねれば仕士をもかね、たくみに局長や

課長の臺所口より攻め入り、僕をして今日あらしめてくれる、第三の
 からめ手と云ふのは、此臺所口から攻め込ことをいふのだ、甲「フ
 ム、あの局長は決して賄賂を取らんと云ふではないか、甲「さうだ
 全くさうだ、なか／＼取らん男だ、それをどをして持ち込んだか、
 兎にかく持ち込んだのはあのお才だ、今では平氣でやりとりをやつ
 てゐる、甲「ハツテネ、それはぬらい腕だ、して見れで君の昇進の
 すみやかな譯は、乙「無論袖の下つをかふにあるのサ、甲「その袖
 のしたをつかふには、乙「無論下婢を撰仕するにあるのサ、甲「フ
 ム、／＼、／＼、して見るとその攻め口は、乙「無論臺所口にあるサと
 言ふた。

○貸して下さい

お定さん、此間貸してあげた梅曆ネ、急によみたいといふ人があり
 ますから、下さいナ、定「へーいつ借りましたか知らん、静「
 ヤナれ定さんだワ、此の前の日曜日(に)それ、おまへさんがわざ／＼
 きて、おくさまが御覽になるからと云つて、定「あ、あ、此の本
 のことですか、あれはおまへさん、くれたではありませんが、静「あ
 ら、あんなことを云つてよ、かしてくれと云つたじやありませんか
 定「さうです、はじめは借りて、あとは下すつたじやありませんか
 静「へー、さうして、定「だつてネ、貸して、あとは下さい
 といふので、かして下さうと云つたんでしやう、するどあなたは、

貸してあげましたやうと言ッたワ

○心にかける

浅草公園の第六區の、江川の玉乗前で、一心になつて繪看板を見て居る十八九の下女風な女の、ポカンとしてゐる側に、二十一二と見ゆる氣のきいた若ものが立つてゐたが、一寸の際にかの下女風な女の、首にうけて居た財布をひつたくり、雪を霞と逃げだした、女はそれと氣がつき、女「掏摸だ〜、とつつかまへて下さいと、大どろありて進かけたが、男はそれを職業の掏摸だ、うまく人中をくりぬけて、とん〜とかけだす、女はかなざりとゑをたて、つかまへて下さいと追つかける、男は人をよけ〜、うまぐかけて往

つて、宮戸座の方へ曲らふとするところで、見まはりの巡査に出會した、巡査はなれてゐるから、とつてい待てと、たちまち襟首をつかまへられた、男「何もあやしいものではありません、人ちがいでございませう、巡「馬鹿を云へ、人ちがひでもかまはん、一体貴様何處へ行く、男「田町まで参ります、巡「なせ駆ける、男「急用でございまして、巡「馬鹿を云へ、用でかけると、何かわるいことをして、一生懸命にかけるとは、かけやうがちがふぞと、押し問答をして居るところへ、息をせい〜とさりながら、かけつけた女は女「ありがたふございます、此奴が私の財布を掏りましたんで、巡「それ見る、どうも貴様のかけやうは、一通りのかけやうでない

と思ふたど云ひながら、掏摸のふところから財布をひつぱり出し、
 巡「これですか、女」ハイ、それでございます、主人からのあづか
 りもので、大切なお金でござります、巡「どうして又取られましたか、
 女」ハイ、玉乗のまへに立ちまして、繪看板を見ております際に、
 巡「うれでは財布を取られるやうなところに、入れておいたのでし
 やう、女」どういたしまして、紐を首にかけまして、ふところにシ
 カと入れておきましたので、巡「首にかけておいて取られたんです
 か、女」ハイ、巡「それあおまへさんがわるい、首にかけずに、心
 にかけて居ればよかつたぞと云ひました、

○下女の情夫

下女「權さん、水を汲んでくれな、權」わ、汲んであげるよ、二
 三杯でよしかね、下女「序でに米をどいでくれ、ばよいに、權」え
 いともく、今店がひまだから、下女「權さん、先ころたのんだり
 ポンと指環はどうしたの、權」ウム、リボンか、リボンはおいらの
 ところにある、それから指環はネ、二三日中に出来てくるよ、純銀
 だせ、下女「それから何時帯の方は尋ねくの、權」あれか、あれは
 來月の五日ごろとしてくれたまへ、チ、下女「あまり長いのネ、
 權」ウム、ながいかも知れぬ、でもふところの都合があるからサ、
 下女「仕方がないワ、待つてゐますよ、權」だがおはねさん、おま
 へにひとつのだのみがあるよ、下「へー——、どんなたのみなの、

權「あのね、ねまへのいふことなら、何んでもきくからネ。他に情
夫をこしらへるだけは、よしてくださいな。下「それは困つたワ、
たのみやうがあまり遅いんだもの」と云ふた。

○中風の薬

あるところに、意地のきたないおさんどんがあつて、見たものなら
何んでも摘まんで見るといふ喰ひ氣ちがいでございしました。此の家
の隠居さんは、毎朝毎朝、あさはやく起きると、何かうま相に一盃
づゝ、呑むのは例になつてゐた、意地きたなのれさんめは、之れを
見ると呑みたくて呑みたくて、ひしづのはしるほど呑みたかつたが
いつも隠居老爺がうちに居るので、どうもぬすんで呑むわけには行

かなんだ、ある日のこと、あさから隠居老爺の留守なことがあつた
そこでおさんめ、今日こそはとねらひをつけ、ひそくちよいの部
屋に目をつけ、やうくそのありかをさがし、家人の目をぬすんで
からに、大きな茶のみ茶碗に一盃つきこみ、こつそりそのがれ出て
便所のなかにかくれ、そつと茶碗のにはひをかぐと、實にうまそう
なかはりがする、しめたと一口呑んで見ると、是れはおどろいた、
苦いことく、口がすぼまつてしまふかと思ふほど苦かつた、おさん
んめはうくの体で逃げだしたが、苦いも道理、中風のくすりとか
いふので、焼酎をもとにして、これに千ふりとかいふ極にがいくす
りを入れ、百日間めんばりしておいて、それから呑むものだと云ふ

ことであつた、併し世間には斯様おさんどんがいくたりもある

○悪戯

万松と云ふ小僧は、僅か九歳といふ小兒であるけれども、そのいたづらのはげしいことは、舌を巻かぬものはない、此の家にお福といふれさんどんが居るが、おかみさんの親類だとかいふので、威ばるはく、ことに此の万松小僧などは、始終ひどい目にあはせられるのである、夕刻のことであつた、洗湯にゆくも何んだとかいふので、行水盥に湯を汲んで、大事なところをあらつたやうじや、ところが何故か、途中で早速よしてしまつたが、サアこれからが大さはぎだ、だれかこつそりといたづらしたものがあるに相違ない、だ

れであらふ、あんなつみないたづらをするものはとのはぎである、そこで何をしましたときいて見たう、おさんどんのおまへをあらつた湯の中へ、蕃椒の粉を入れたものがあるのだ、だからおさんどんのおまへが、はれたはくは、何が何やら分らなくなつてしまつたといふことなのじや、醫者をよぶ、産婆をまねぐ、それはく大さはぎでんるけれども、いたづらもの、主が分らぬ、おかみさんはやつきとなつて、詮議するけれども、どうしてその本尊さまが分らぬ、旦那もこまり、番頭もこまり、丁稚小僧もこまつてかゝに、そのいたづらものをさがすけれども、どうしても知れぬといふのだ、そこでおかみさんも仕方がなく、泣き寝入りになつてから四五日た

つと、ある日万松は旦那の前に出で、先達ての蕃椒は、私の入れたのでござりますと自白した、どうしてそんなことをしたといふたらおさんどんがあまりひどくいぢめるから、そのかたきうちをしたのだといふことじや、何故どうがらしを入れたかといふたら、たゞるどからいから、下の口とかにもからいだらふとおもふてといふのであつた、

○豆泥棒

新さん、東京に着いたからといふて、決して油断してはなりませんよ、なんでもお金のあつちうちに商賣をはじめて、あたり中よくくらさなくてはなりませんよ、新「ア、分つた、おますさん、おまへも

今までのやうでなく、しつかりやつてくれなくては、困りますよと汽車の上野につかぬ前からさまじく、相談をして、いよく着いたといふので、兎に角宿を求めやうとて、宿ひきにひかれて泊り込んだのは、下谷廣徳寺まへの、粕壁屋といふ悪やせである、だがその夜は何事もなく過ぎて、第二日目の夜に、ひとりの相客が出来て、三日のあさ、相客の立つたあとで、始めて氣がついて見ればいものちどたのむ旅費はすべて、盗み去られてのこれるものは、着かへの衣類第六枚のみであつた、あたりのねどろきは言ふも管である、刑事も來、調査も來たけれども、盗まれた金子は元へもどつて來ぬ、そこでふたり相談の結果、別れ〜となりて、三年のあひだ奉公する

ことゝなつた、しておますの住み込んだは、日本橋は本石町のさる唐物店であつた、素より如才のないおますのことであるから、上にも下にもよく行きわたり家中の信用をひとりでしよつてゐたが、はなしかはつて新三郎は、行くさきぐでなまげちとし、且つあそぶと云ふことまでねほね、随分と不義理な借財をよするやうになつて苦しまされに、人の物を盗むやうになつた、或る晩に、本石町の唐物店にひとりの泥棒が忍び込んだ、併し新三郎の泥棒だを見えて、ひとりの番頭の足をふみ、ツメに番頭共に目をさまされて、とつつかまへられてしまつた、それから土蔵の前のひつばられて、警察につき出すの、イヤ、何も取られぬから、究明して逃がしてやれのと、大

さはぎをしてゐるから、ねますはおそろく泥棒のかほを見ると、これはおどろいた、内縁の享主の新三郎である、すると新三郎の方でも、ちらりとおますを見たが、しまつたおますの主人のところへ泥棒に這入つたのだ、おますにこんなことを知られては、モウ百年目だ、度胸をすえるはこゝのところだと、わる智慧にすぐれた新三郎は、たちまち悪黨の本性をあらはし、新イヤ みなさんに済まんことをいたしました、私は御當家さまへ、泥棒するために這入つたのではござりません、番「オイ、何をいふのだ、知らぬ人のうちに夜夜中忍び入つて、泥棒でないもよく出来た、新「へい、さう思召す御無理はありませぬ、ハイ、耻をおはなし申しませぬけ

ればおわかりになりますまいから、匿さず何事も申しあげます。何を
をおかくし申しましたやう、私は新三郎と申しまして、此方に御奉公
いたして居ります。おますの亭主でござります。一回「なんだと、
おますさんの亭主だと、互いにあやしいといふかはつきして居たが
番」してれますさんの亭主が、何んで忍び込んだのだ、新「ハイ、
別れて一年近くなりますが、不斗戀しくなりまして、ツイ忍び込ん
だのでござります。尤もおますは知らずに居りましたから、おます
に忍び参りましたも、きつとさはぎになつたらふと思ひます。一回
はなしをきけば本當らしい、それではおますさんを呼んでと、れま
すを呼んでつきあはすると、おますは今更のやうにびつくりして、

「おなごんはなせことほりもなく人さまの家へ忍び入られました
御用があるなら、一本の端書で澤山でありますのにと云へば、新三
郎はあたまをかきく、新「泥棒に這入るに、どうして端書で知ら
されうや、あ「エッ、泥棒にとおどろけば、新「應サ、泥棒も泥棒
豆泥棒にとどろいた、

○賭

おくまごん、おめへよく芋を喰ふな、一度にどのくらいいけるネ、
熊「どうも、十錢ぐらいはたべられたらう、番頭「ナニ、十錢たべ
る、十錢てへ言はば、四五十切れあるよ、くま「どうも、それくら
いもくはなけれぬ、喰つた気がしないよ、番「こちら驚ろいた、そ

れでは十銭おいらが買はふ、若し喰へきれないときは、ねまへの
十銭をはらつた上に、二十銭を罰として出さなよ、くまよろしい
若し喰つてしまつたときは、ねまへが二十銭出すだらふネ、番無
論サ、それでは竹どんに買つてもらはふと、十銭出して買はせだが
芋も高くなつたよ見へて、四十切れしかなかつた、ねくまは風呂敷
をあけて一つく皮をむき、喰ふばかりにこしらへて、それから茶
を一杯ぐつとひつかけ、くま「番頭さん、見て居て頂戴よと言ひな
がら、さつくと喰ひはしめ、見てゐるうちに、十本、二十本、三
十本とたいらげて、見てゐるところで、四十切を食つてしまつた、
番頭はおどろいて、よくマア食はれたもんだ、苦しくないかい、

くま「別に苦しくはないが、胸がやけるのでこまるよ、ゲイー、ゲ
イー、番「約束だ、二十銭は出すよ、くま「ゲイー、ゲイー、ねど
ろくのはこればかりだ、ゲイー、ゲイー、明輩のおとらこれを見て
とら「おくまさん「ピットル」をおのみよ、四五滴水にたらしめて、
つと呑んでごらん、どのくらいよいか知れないよ、くま「それでは
一つ吞ましてくんなど、おとらにこしらへてもらつて、一息にぐつ
と飲みほし、くま「あ、よいくすりだ、エイー、エイー、あ、さつ
ぱりとした、とら「しつかりなほつたらふ、くま「ア、しつかりど
なほつた、また喰はふかと云ふた、

○鼻の功名

ある商家の主人は、大層お伊勢さまを信仰しまして、毎年／＼お伊勢さまに参詣し、商賣繁昌を祈つて居ります、ある日のこと、お伊勢さまのお札に、何かにほひでもついて居たつたと見ゆ、鼠のやつがこれをひいて往きました、下女のお徳と云ふものが、ひとり之れを見て居て、そのひき込んだところまでたしかめおいて知りぬ顔の半兵衛をきめて居ました、サア翌朝になると、第一番に主人がおきて、お燈明をれ伊勢さまにあげて見ると、今年いたいてきたお札が紛失してゐる、サア大變だ、お伊勢さまのお札が紛失したのは何か凶事のある知らせに相違ない、さりとて、人のぬすみて行くべき品でないから、どうしても何處にかあるに相違ないとして、番

頭から丁稚小僧まで總が／＼りて、たづねさがしたけれども、かひくれそのかげさへも見あたらぬ、サア主人の心配は一通りではない、是れはさつと、家に凶事のあるしるした、あたる罰は避けるに道がないと、大層心配してゐるところへ、奉公してより半年にもならぬ、お徳が進み出で、徳「旦那さま、わたくしは物のにはをかぎわけて、その所在を知るの妙術を知つて居ります、うわいひますれば、お伊勢さまのお札が紛失したさうでござりますが、ひとつわたくしの妙術で、かぎ出して見やうかとおもいます、旦「十二おまへが、はなで嗅ぎ出すと、それや妙だ、百計つまでしまつたから、是非ひとつ嗅ぎだしてくれ、徳「よろしうござります、ひと

つかいで見ましやうと、たかくもない鼻をひこつかせてあたりをク
ン／＼するから、家中のものはひとつになつて、一回「これやお
もしろい、お徳どんに其様藝があるとは珍らしい、サア／＼見物じ
や見物じやと、おもしろ半分にははいてゐるが、お徳は少しもわる
びれる風もなく、はなをひこつかせてあいらちをあるいて居た
が、だん／＼と鼠のひき込んだところへゆき、徳「ハ、ア、是の
はひは、こゝにきて止まつたとすれば、かならず此のあたりに相違
がないと、なほあたりをかいで見、徳「旦那さま、にほいが茲と
どまつてしまいました、そして此の天井うらが、尤もあやしいとお
もはれます、どうかひとつ、さがし下さいますといふから、それつ

どいふて天井板のうらまでさがして、見ますと、いかにも天井うら
の隅のところから、あちこち鼠にかみやぶられて、ひよつこりと出
てきました、サア主人のよろこびやうと云ふものは、實に一方なら
ぬことであつた、ある番頭はお徳ひかひ、どうして、斯様妙術を知
つてゐるといふたら、私共の先祖、古猫の殺されるのを助けて、
其の返禮に古猫から、許された術だと説明したと云ふことじや。

○壁に耳あり

かべに耳ありといふことを忘れ、近所のおさんどんが五六人よりあ
つまり、頻りに主人の悪口をいふておるところへ、甲のおさんのど
ころのおかみさんがちよ／＼とあゆんで来た、すると甲のおさん